刀剣が語る

巨大古墳の時代

日時　令和４年１０月３０日（日）　　会場　大阪歴史博物館講堂

表紙上写真：茶すり山古墳出土刀剣及び刀剣復元品（兵庫県朝来市教育委員会提供）
表紙下 CG 画像：百舌鳥古墳群俯瞰復元図（大阪府堺市提供）
裏表紙 CG 画像：古市古墳群俯瞰復元図（大阪府堺市・羽曳野市教育委員会・藤井寺市教育委員会提供）

ごあいさつ

古代歴史文化協議会は、古代歴史文化の研究・活用に関心のある 14 県で構成し、個々の地域的な研究だけでは分かりにくかった日本の大きな古代史の流れを解明することを目的に、平成 26 年度から共同で調査研究を行っています。

令和元年度からは第２期の共同調査研究テーマとして「古墳時代の刀剣類」について調査研究を行うとともに、その研究成果を講演会や展覧会で御披露するなど全国の皆様に情報発信しております。

このたびの講演会は、「刀剣が語る巨大古墳の時代」と題して、古墳時代中期に焦点を当てました。古墳時代中期は、倭の五王が中国に遣使して国際外交に臨んだ時代であり、百舌鳥（もず）・古市（ふるいち）古墳群に巨大古墳が次々と造営された時代でもあります。刀剣を手がかりとして、王権の姿と列島各地の様相について、最新の調査研究と出土事例を交えながら考えてまいります。

この度の講演会の開催にあたり、ご協力を賜りました大阪歴史博物館をはじめとする関係者・関係機関の皆様に厚く御礼申し上げますとともに、本講演会を通じて、皆様の古代の歴史・文化への関心がさらに高まることを願っております。

令和４年１０月３０日

古　代　歴　史　文　化　協　議　会

会　長　島根県知事　丸　山　達　也

第６回　古代歴史文化講演会

刀剣が語る巨大古墳の時代

◆１３：００　　開会あいさつ　　中川 智巨 （奈良県文化資源活用課 課長）

◆１３：１０～１４：２０

基調講演　　古墳時代中期の政権構造と軍事
－百舌鳥・古市古墳群の武器・武具－　　資料 1 ～ 14 頁

講　師　　田中晋作 （山口大学客員教授）

〈休憩〉（１５分間）

◆１４：３５～１６：２０

パネルディスカッション　　刀剣が語る巨大古墳の時代

パネリスト　田中 晋作
渡瀬 健太 （兵庫県立考古博物館）　資料 15 ～ 20 頁
水野 敏典 （奈良県立橿原考古学研究所）　資料 21 ～ 24 頁
土井 翔平 （佐賀県文化・観光局文化課）　資料 25 ～ 30 頁
加藤　徹 （宮崎県立西都原考古博物館）　資料 31 ～ 36 頁
尾崎 光伸 （広島県立歴史博物館）　資料 37 ～ 41 頁

コーディネーター　水野 敏典

◆１６：２０　　閉会あいさつ　　大澤 研一（大阪歴史博物館 館長）

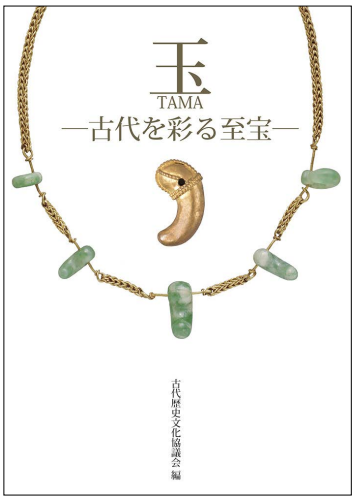
日　時：令和４年１０月３０日（日）
１３：００～１６：３０
会　場：大阪歴史博物館 講堂
主　催：古代歴史文化協議会
大阪歴史博物館

古代歴史文化協議会とは

古代歴史文化の研究・活用に関心のある１４県で構成し、
連携して共同調査研究・情報発信をおこなっています。

構成県

埼玉県・石川県・福井県・三重県・兵庫県・奈良県・和歌山県
鳥取県・島根県・岡山県・広島県・福岡県・佐賀県・宮崎県



『玉　－古代を彩る至宝－』
研究成果を１冊にまとめた一般向け書籍
ハーベスト出版　定価 1,980 円（税込）

協議会ホームページ
14 県の玉出土遺跡データベースや、過去の講演会
記録などを掲載しています。

第１期のテーマ「古墳時代の玉類」の研究成果は、書籍やホームページを通して情報発信しています。

協議会 HP

共同調査研究テーマ「古墳時代の刀剣類」のねらい

刀剣類は古墳時代の副葬品として普遍的で全国で大量に出土していますが、その数があまりに膨大で多種に及ぶことから、網羅的な研究が十分におこなわれていません。そこで当協議会では、個別地域の枠を超え、広い視野で刀剣類の総合的研究を進めてまいりました。

日本で弥生時代に登場する初期の鉄製刀剣類は、中国からもたらされたものと考えられています。また、古墳文化を象徴する金銀で飾った装飾付大刀もまた、三国時代の朝鮮半島各地域との密接な交渉を物語っています。このように刀剣類の研究は、広く東アジアにまたがるダイナミックな交流を読み解く手がかりになるでしょう。また、刀剣類は武力・権力を象徴する品であり、所有する人物の軍事的権能や、権力構造と密接にかかわる器財と考えられてきました。刀剣類の生産～所有に至る各地の様相を明らかにすることで、形成過程にある国家の実像をリアルに描き出すことができると期待されます。

基調講演

古墳時代中期の政権構造と軍事
－百舌鳥・古市古墳群の武器・武具－

田中（たなか）　晋作（しんさく）
（山口大学客員教授）

はじめに

古墳時代に入り、有力古墳の副葬品が鏡（玉類）＋武器＋鉄製生産用具を基本にして構成されるようになる。権力、支配の正当性を示す象徴：鏡（玉類）、これを保障、担保する武力：武器、これらを支える生産：鉄製生産用具を保持した被葬者の姿を写し出しているのであろうか。

黒塚古墳や椿井大塚山古墳、西求女塚古墳などといった古墳出現期の一部有力古墳では、この段階ですでに刀や剣、長柄のヤリ、銅鏃や鉄鏃などの武器が整うとともに、被葬者個人が使用する枠を越えた量の副葬がはじまっている。このことは、象徴的な意味合いをもつ鉄製冑を含め、権力や支配の実効性を保障、担保するうえで、武器：武力がきわめて重要な役割を果たしていたことを物語っている。

さらに、中期には帯金式甲冑が加わり、攻撃用武器の主体を占める刀剣や鉄鏃などの副葬、埋納量は、社会基盤を支える各種鉄製生産用具のそれをはるかに上回り急速に拡大する。古墳時代は、貴重な鉄素材を各種生産用具に優先して、武器の製造に費やさなければならない社会へと移行していく。長期間にわたって、武力、あるいは軍事をもって解決を必要とする政治的課題に直面していたことがその背景にあったものと理解される。

このことは、前期後半（369 年）、百済地域の政権勢力から日本列島の政権勢力へ贈られた七支刀、中期の埼玉稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣や江田船山古墳出土銀錯銘大刀などにみられるように、文字による政権勢力間の関係や、政権勢力と地域勢力との関係を確認する記録：記憶が刀剣に仮託して行われており、列島を越えて機能した武器：武力の存在によっても裏付けられる。

ここでは、のちに畿内とよばれるようになる地域を対象にして、とくに中期の古墳に副葬、埋納された武器について、これを必要とした政権勢力の動静と照応させながら考えるところを述べる。なお、以下では、古墳時代の政権勢力を、畿内に所在した複数の有力な勢力によって構成された政治体とすることから畿内政権と呼称する。

1．古墳時代の政権構造とこれを武力をもって支えた諸勢力の推移
－百舌鳥・古市古墳群の勢力が占める位置－

武力が政治権力の行使を保障、担保する手段であって、これを運用する政治権力に連動してそのあり方が変化するとの視点から、まず古墳時代の武器のあり方と政権勢力の動静を照応させることからはじめてみたい。

古墳時代の政権勢力についてはさまざまな考えが提示されているが、ここでは大和盆地東南部地域に興った有力勢力が、古墳時代をとおして安定した成長を遂げていくのではなく、複数の有力な勢力の間で、政権内の主導権をめぐる確執があったと理解している。すなわち、広義の大和古墳群を中心にした大和盆地東南部地域の勢力→佐紀古墳群の勢力→百舌鳥・古市古墳群の勢力→今城塚古墳を中心にした淀川水系と猪名川流域の勢力→大和盆地南部地域の勢力へと、政権内の主導権が時間的な重複をもって移動したと考える。

また、それぞれの勢力が政権を担った段階を指標にして、大和盆地東南部地域の勢力：前期前半・半ば、佐紀古墳群の勢力：前期後半、百舌鳥・古市古墳群の勢力：中期（前半・半ば・後半）、今城

塚古墳を中心にした淀川水系と猪名川流域の勢力：後期前半、大和盆地南部地域の勢力：後期後半に区分している。

（１）武器の大量副葬のはじまりと勢力間の格差の顕在化（前期前半・半ば）

前期前半、政権勢力として台頭した大和盆地東南部地域の勢力と、これに連なる有力勢力のもとで、刀・剣・ヤリ・鉾・鉄鏃・銅鏃・小札革綴冑などといった多様な武器が出現する。このことは、時代を画する大きな変化である。とくに、当該期にみられる小札革綴冑や素環頭大刀については、これを中国からもたらされた威信財的な性格を兼ね備えた武器とする考えがあり、その出土古墳である黒塚古墳（刀 17・剣 3・ヤリ 14・鉄鏃 280+）や椿井大塚山古墳（刀 7+・剣 12+・ヤリ 7+・銅鏃 14+・鉄鏃約 200）、西求女塚古墳（刀 2・剣 34・ヤリ 12）などでは、冒頭に示したように、すでに被葬者個人が使用する枠を越えた量の副葬がはじまっている。

当該期の安満宮山古墳（刀 1）や小泉大塚古墳（剣 1）などと比較するまでもなく、武器の所有にみられる格差は、大和盆地東南部地域の勢力がその台頭に際して、武力がきわめて重要な役割を果たしたことを示している。さらに、前期半ばのメスリ山古墳副室から出土したヤリ 212 本に象徴されるように、政権を維持していくうえで、他の勢力を凌駕する武器の集積が継続して求められていたことがうかがえる。

（２）組成として整った武器の出現（前期後半）

前期後半、畿内政権の主導権は、大和盆地北部の佐紀古墳群を中心にした勢力へと移動する。この時期を境にして、武器のあり方にも変化がみられる。

佐紀古墳群では、大型主墳での武器の内容は知られていないが、猫塚古墳やマエ塚古墳、丸塚古墳といった中・小型主墳で多くの武器が出土している。たとえば、中型主墳：マエ塚古墳では、盗掘を受けていたにもかかわらず、刀 24、剣ないしヤリ 119+ という多量の武器が残されていた。メスリ山古墳と同様に、その組成は特定の武器に偏ったものであるが、弁天山古墳群や玉手山古墳群といった有力古墳群で出土する武器がきわめて限られていたことからすると、政権勢力と諸勢力間に、刀剣やヤリを中心として、武器の所有にみられる格差が急速に拡大していたことがわかる。政権の主導権を握った佐紀古墳群の勢力がその優越性によって、それまで以上に大きな影響力をもつことになったと考えられる。

一方、前期半ば、日本列島ではじめての鉄製短甲：竪矧板革綴短甲が紫金山古墳（刀 37・短刀 4・剣 33（ヤリを含む）・鉄鏃 165）で出土し、前期後半には方形板革綴短甲が現れる。方形板革綴短甲は、日本列島では 19 古墳 20 出土しており、その分布は畿内およびその周辺地域を中心に、日本列島各地に一定の広がりをもつようになる。

とくに、畿内でみられる方形板革綴短甲出土古墳では、佐紀古墳群でみられたような特定の武器に偏った多量副葬とは異なり、刀や剣、ヤリや鉾、銅鏃や鉄鏃、なかには盾を含む組成として整った武器を所持していたことが注目される。このような武器組成の出現は、それまで想定されてこなかった政治的課題への対処から生まれてきたものと考えられる。しかし、当該の古墳は、この段階に台頭する一部の新興中小規模古墳が主体になっており、しかも特定の古墳群や地域に集中することがない。

また、図 1 に示したように、前期後半に併存する小札革綴冑と方形板革綴短甲は、京都府瓦谷 1 号墳を除いてセットとして所持されることがない。このような武装装備の違いは、前者が大和盆地東南部地域の勢力を、後者が佐紀古墳群の勢力をと、それぞれが武力で支える政権勢力が異なっていたことによって現出したと考えられる。

（３）装備が標準化された軍事組織の成立（中期）

百舌鳥・古市古墳群の勢力へ畿内政権の主導権が移動する中期に入ると、長刀の一般化、鉾や盾の増加、鉄鏃の大型化、そして帯金式甲冑の出現と、それまでの武器と一線を画する大きな変化がみられる。また、武器の副葬、埋納量も両古墳群を中心に飛躍的に高まる。甲については、中期半ばに機能的にすぐれた挂甲が導入されるが、中期をとおして帯金式甲冑が防御用武器の中心的な位置を占めている。

ところで、中期に入って出現する帯金式甲冑は、百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとで一元的に開発、生産され、その意図によって供給されたと考えられている。とくに、中期の武器は、攻撃用武器と防御用武器が表裏一体の関係をもって推移しており、実用武器としての機能がそれまで以上に高まっていたことがわかる。

また、中期でみられる甲冑の受給関係は、畿内およびその周辺地域という限られた範囲にあっても一様ではなく、きわめて強い偏在性が認められる。このような現象は、甲冑の受給が百舌鳥・古市古墳群の勢力による政治的、軍事的判断によって行われていたことを示すもので、とくに両古墳群の勢力が政権内の主導権を確立する中期半ば以降、武器の運用が特定の勢力を中心にして担われるようになったことがわかる。さらに、甲冑を核にした武装装備の標準化は、統一された武器による軍事組織の編制を可能にする基盤が整えられていたことを示すきわめて重要な現象でもある。

ところで、中期の帯金式甲冑出土古墳は、方形板革綴短甲を主

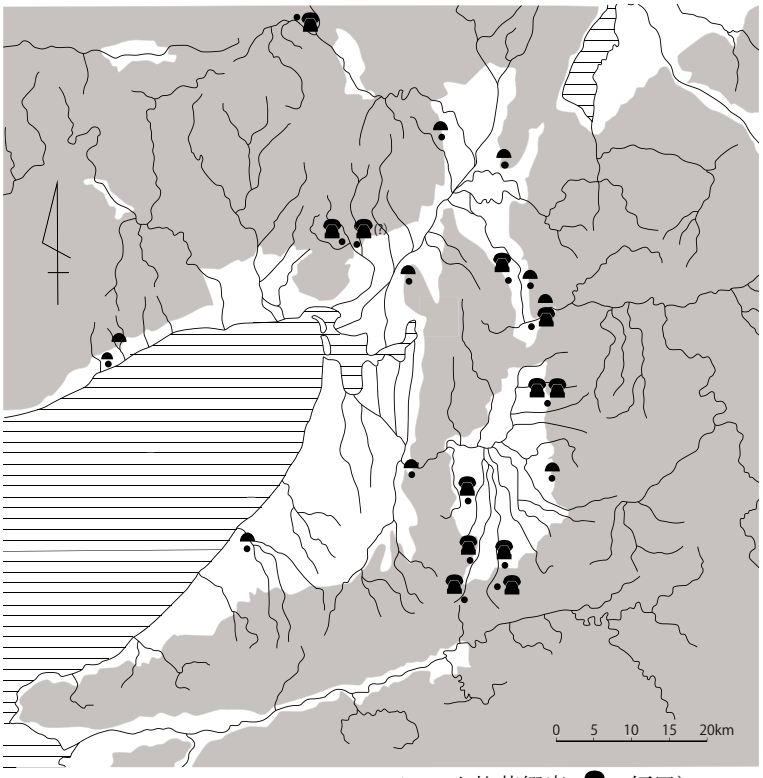


図１　前期甲冑出土古墳分布図（：小札革綴冑　：短甲）

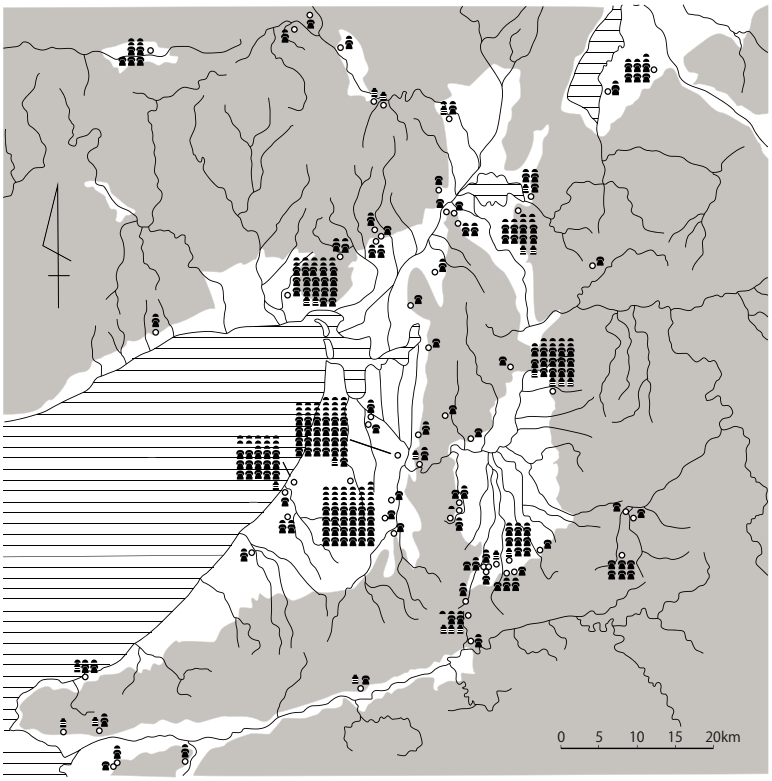


図２　中期甲冑出土古墳分布図（：冑　：短甲　：挂甲）

体にした前期後半の鉄製短甲出土古墳に比べ、その数が飛躍的に増加している。しかし、前期後半に佐紀古墳群の勢力のもとで台頭した、方形板革綴短甲を含む組成として整った武器をもつ新興中小規模勢力の後継は、新沢千塚古墳群の勢力と可能性がある高取町域や御所市域を除いて、継続して帯金式甲冑が供給される対象になっていない。鉄製短甲の検討では、竪矧板革綴短甲→方形板革綴短甲→長方板革綴短甲という、型式学的な組列や技術的な連続性が示されているにもかかわらず、方形板革綴短甲をもった前期後半の新興中小規模勢力の多くは、中期に継続することなく断絶している。

（４）武装装備の一新（後期前半・後期後半）

後期前半、百舌鳥・古市古墳群の勢力に替わって、今城塚古墳を中心にした淀川水系と猪名川流域の勢力が台頭する。この変化と軌を一にするように、それまで主体を占めていた帯金式甲冑が挂甲に置き換わるという、防御用装備の刷新が図られる。挂甲に関しては、顕著な型式変化をしないで継続していることが指摘されているが、帯金式甲冑の消滅はまさに劇的な変化である。機能的に優れた挂甲による装備の統一は、戦力整備という点からすると革新的な意味をもつが、一方でそれまで備蓄されていた帯金式甲冑が廃棄、更新されるというきわめて大きな社会的代償をともなうことでもある。

また、後期前半の挂甲出土古墳の分布は、中期の帯金式甲冑出土古墳の分布と重ならない。このような現象が生じた要因は、百舌鳥・古市古墳群の勢力の後退と連動して、帯金式甲冑の副葬が顕著にみられた中期の新興中型古墳群や一部の初期群集墳で新たな古墳の築造が停止することにある。これに対して、挂甲出土古墳は、今城塚古墳のもとで新たに出現する地域の有力首長墳が主体を占め、出土古墳数と複数副葬事例の減少により挂甲の出土量自体が大きく低下する。

このことは、百舌鳥・古市古墳群の勢力を武力をもって支えた、多くが帯金式甲冑を装備した勢力が、今城塚古墳を中心にした勢力のもとでも引き続きその役割を担うのではなく、前期後半から中期への移行段階でみられたと同様に、後期前半の段階で刷新された装備をもつ新たな勢力によってその役割が取ってかわられたことによって生じた現象であると理解できる。今城塚古墳を中心にした勢力が、大きな社会的代償を伴う防御用装備の刷新を断行できる力をもっていたことを示すとともに、これを必要とした政治的、軍事的課題に直面していたことが想定される。

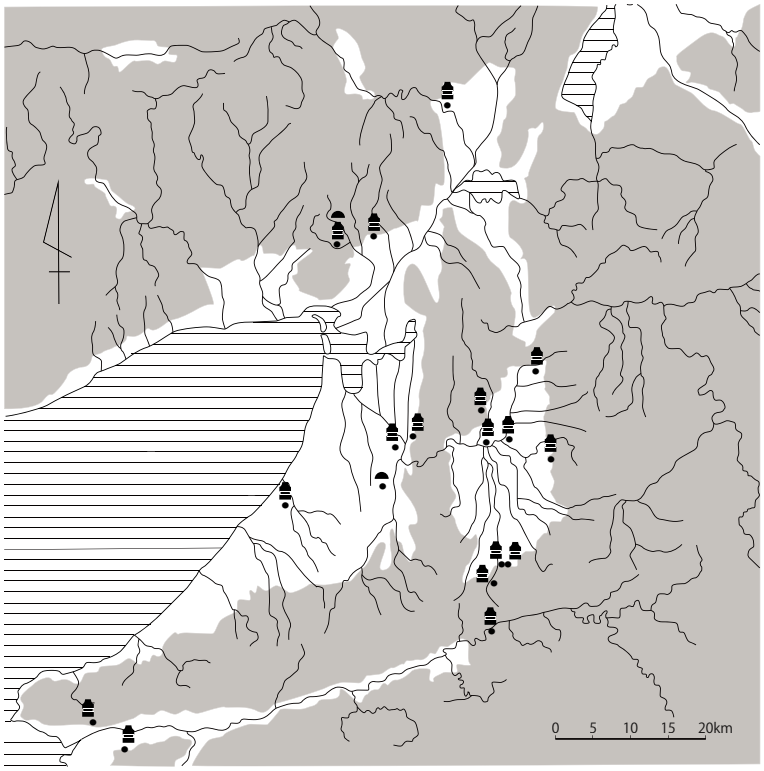


図３　後期前半甲冑出土古墳分布図（◓：冑　▄：挂甲）

さらに、大和盆地南部地域の勢力へ政権内の主導権が移動する後期後半に入ると、挂甲出土古墳の分布が、やはり後期前半の分布と重なることがなく、出土古墳数もさらに減少する。

後期前半に今城塚古墳を中心にした勢力を武力をもって支えていた勢力は、継続して後期後半以降の甲冑の副葬対象になっていない。このような現象については、軍事の発展に伴う甲冑の所有、管理のあり方や葬制の変化などがその要因として考えられるとともに、やはり大和盆地南部地域の勢力を武力をもって支えていた勢力が、後期前半と異なっていたことを示していると考えられる。

このように、畿内政権内での主導権の交替に連動して、それぞれを武力をもって支えた諸勢力も交替していったと考えられる。つまり、政権勢力を武力をもって支えた勢力は、古墳時代をとおして継続してその任を担うのではなく、それぞれの段階で政権勢力の座にあった勢力、さらにいえば首長:大王にきわめて近い位置にあって、その人格的関係によって推移していたことが考えられる。このことは、とくに顕著な動きをみせる畿内およびその周辺地域における武器:武力のあり方の特質といえる。

2. 百舌鳥・古市古墳群の構造とその推移

前章での内容を踏まえ、古墳時代中期の政権勢力である百舌鳥・古市古墳群の勢力についてより詳しくみていくことにする。

中期の政権勢力が形成した古市古墳群や百舌鳥古墳群は、「大型主墳」である大型前方後円墳、相対的に規模が劣る「中型主墳」や「小型主墳」に加え、特定の古墳と深い結びつきが想定される従属墳:「陪塚」によって構成されるようになる。また、帆立貝形古墳や方墳が加わり、古墳群を構成する古墳が多様化する。このような現象は、前代の佐紀古墳群（西群）ではみられなかったことで、古墳群の構造ばかりではなく、古墳群を構成する古墳数、また古墳の規模の拡大などの点において、佐紀古墳群（西群）との格差が歴然となる。

さらに、古市古墳群では、仲津山古墳の陪塚:高塚山古墳や市野山古墳の陪塚:長持山古墳などのように人体埋葬を主眼とした陪塚と、誉田御廟山古墳の陪塚であるアリ山古墳などのように特定物品の埋納を主眼とした陪塚という性格の異なる陪塚が併存する。一方の百舌鳥古墳群にあっても、特定物品の埋納を主眼とする百舌鳥陵山古墳の陪塚:七観古墳や中型主墳の御廟山古墳の陪塚:カトンボ山古墳があり、人体埋葬を主眼とした陪塚の存在は明確ではないが、ほぼ同様の構造をもっていたと考えられる。

つぎに、内容が判明している古墳が多い古市古墳群を対象にして、その構造の推移をみてみたい。古市古墳群では、全長 200 m の大型主墳:津堂城山古墳が突如として築造される。その出現は、他の大型古墳群と同様、きわめて唐突なことである。これにつづいて仲津山古墳、さらに誉田御廟山古墳へと大型主墳の築造が進む一方で、全長 150 m前後の古室山古墳や野中宮山古墳のような中型主

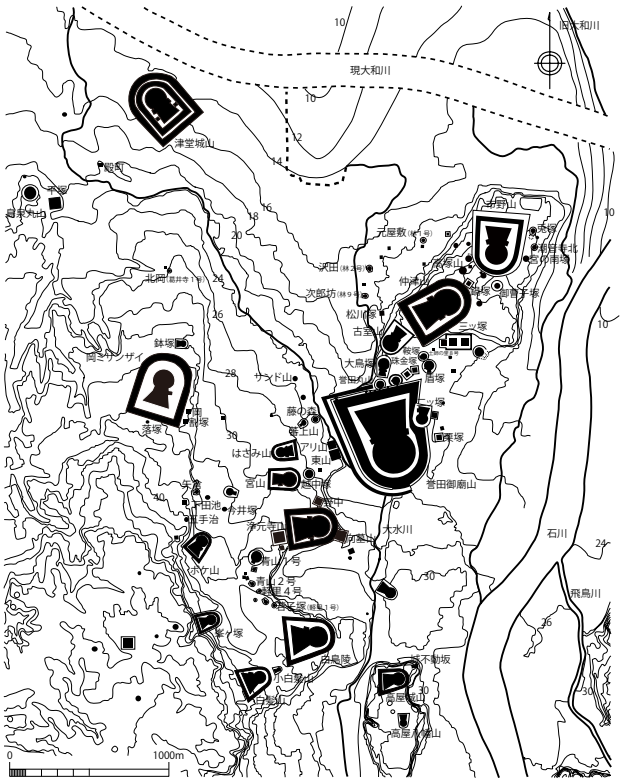


図４　古市古墳群分布図（一瀬和夫氏提供一部改変）

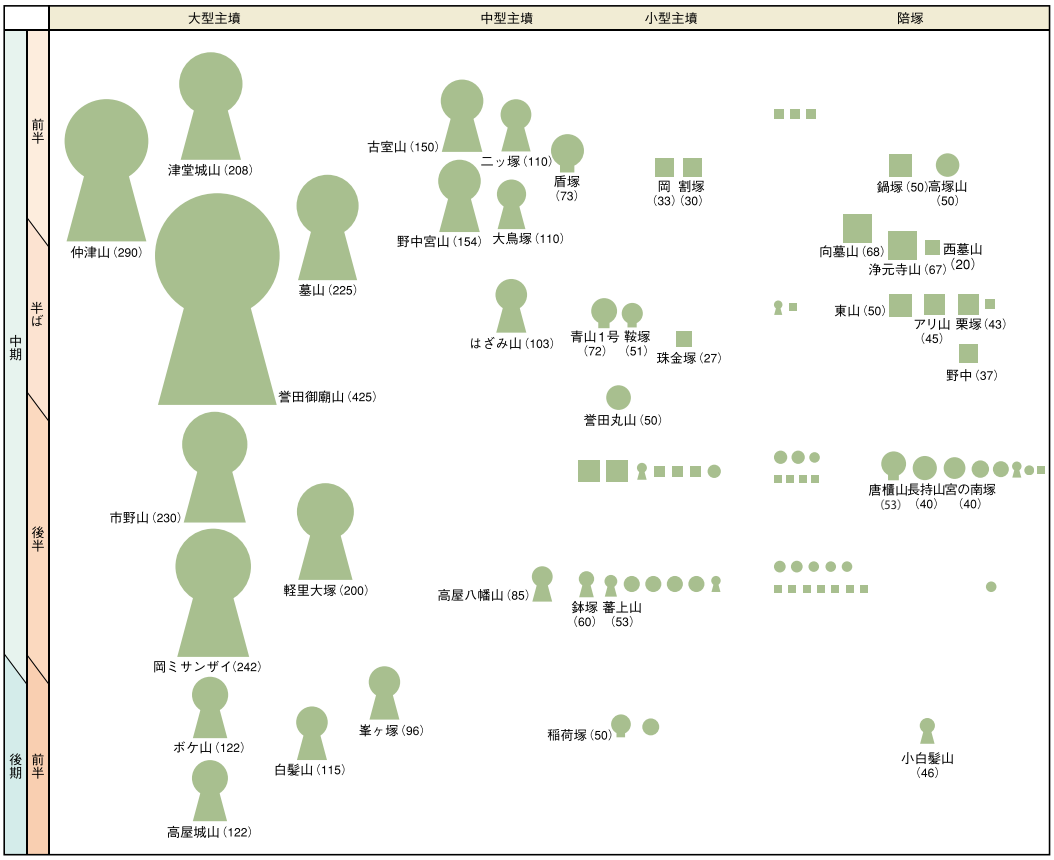


図５　古市古墳群古墳編年図

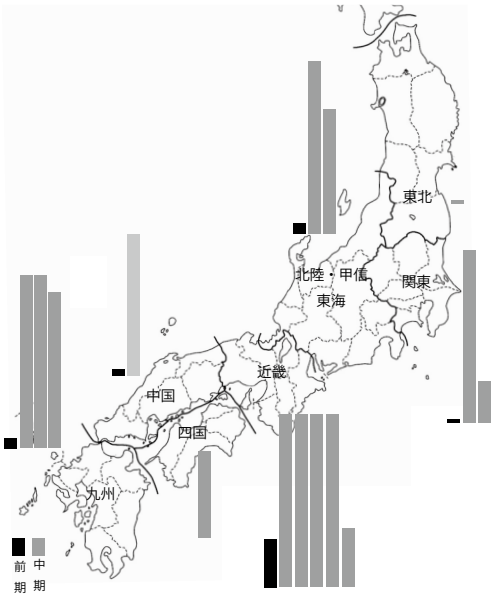
墳や小型主墳が併行して築造される。この過程で、津堂城山古墳の段階では明確でなかった陪塚が新たに加わる。一方、古市古墳群で最大規模をもつ誉田御廟山古墳の築造を境に、中型主墳の規模が急速に縮小し、大型主墳との格差が拡大するとともに、小型主墳や陪塚がその数を増していく。このような現象は、誉田御廟山古墳を境に生じた勢力内の中間層の後退を示すとともに、大型主墳の被葬者が勢力内で自らの権能をより強く履行することを保障する陪塚や小型主墳の被葬者を膝下に収めていくという、権力集中の過程を示しているとみることができる。つまり、古市古墳群の構造とその推移は、規模や墳形を巧みに組み合わせることによって大型主墳との格差を顕在化させ、権力と富の所在やその大きさ、また勢力内での序列を可視化させる装置として機能していたと考えることもできる。

３．大量の武器を必要とした時代

前章でみた古墳群の構造とその推移を踏まえ、今回の主題である武器について検討してみたい。以下では、現時点で判明しているという条件の下ではあるが、事例数が多い古市古墳群を中心に、百舌鳥古墳群の事例を参照しながら進めていくことにする。武器の推移をみる指標として、まず甲冑の副葬、埋納状況をとりあげてみよう。

（１）甲冑出土古墳の推移

古市古墳群では、古墳群形成の端緒となった大型主墳：津堂城山古墳で、すでに短甲１の副葬が確認できる。中期前半の段階では、中型主墳：盾塚古墳でも冑１・短甲２の副葬がみられる。また、同時期の百舌鳥古墳群の中型主墳：百舌鳥大塚山古墳では冑３・短甲６以上と、この段階で甲冑の多量副葬、埋納がはじまっている。中期半ばでは、古市古墳群では大型主墳の事例はないが、大山古墳（前方部）で金銅製の冑１・短甲１が知られている。古市古墳群では、中型主墳：鞍塚古墳で冑１・短甲



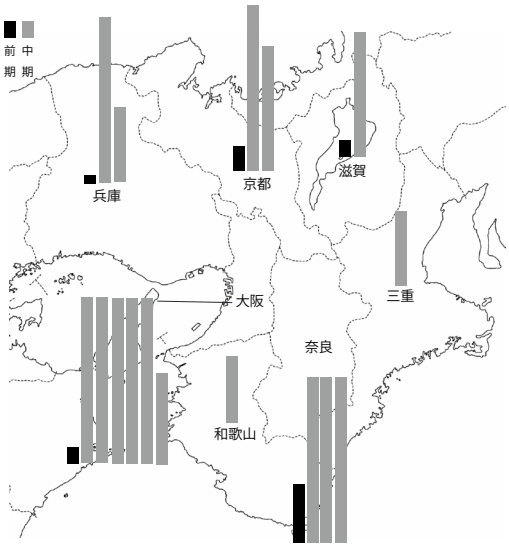


図６　前期・中期の地域別甲（挂甲を含む）出土量（棒グラフ１本の単位は 50）

図７　前期・中期の近畿地方府県別甲（挂甲を含む）出土量（棒グラフ１本の単位は 20）

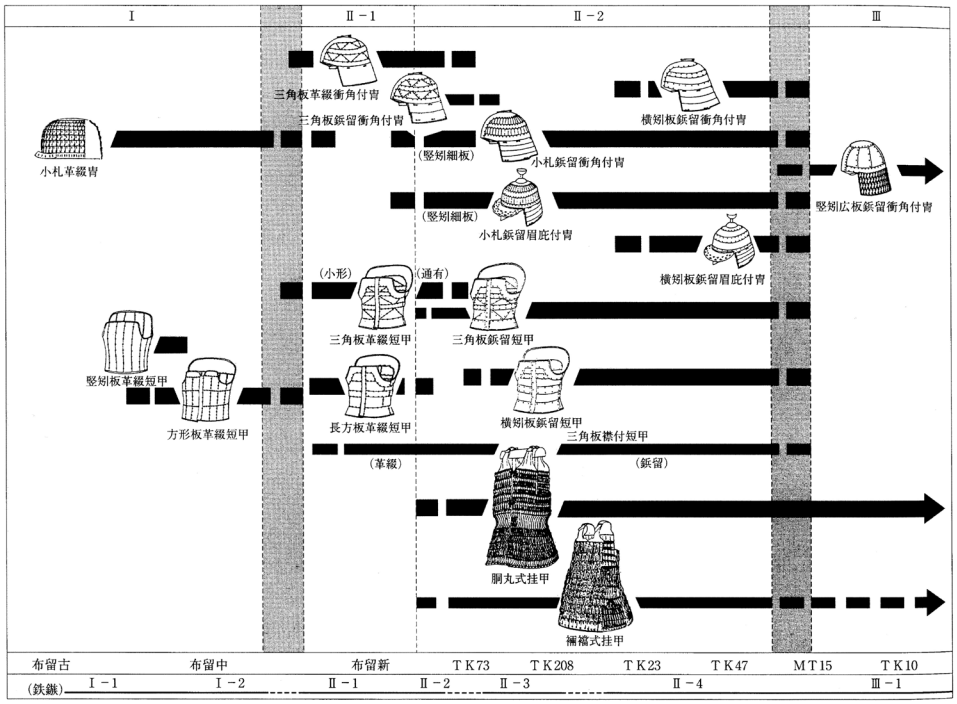


図８　甲冑変遷図

1 に加え、新たに小型主墳：珠金塚古墳南槨：冑 3・短甲 4、同北槨：短甲 1 や藤の森古墳で短甲 1 の副葬がみられる。墓山古墳に伴う特定物品の埋納を主眼とする陪塚：野中古墳では、両古墳群でもっとも多い冑 11・短甲 11 が埋納されていた。百舌鳥古墳群でも、百舌鳥陵山古墳に伴う特定物品の埋納を主眼とする陪塚：七観古墳で、冑８・短甲６という多量埋納がみられる。さらに、中期後半では、中（小）型主墳：誉田丸山古墳で短甲 1、市野山古墳の陪塚である長持山古墳で冑 1・短甲 1・挂甲 1、同じく唐櫃山古墳では冑 4・短甲 2 が出土しており、新たに人体埋葬を主眼とした陪塚でも甲冑の副葬がみられる。

このように、百舌鳥・古市古墳群における甲冑の副葬、埋納は、その形成段階から大型主墳と中

型主墳ではじまる。中期半ばには、特定物品の埋納を主眼とする陪塚や小型主墳もその対象になり、さらに中期後半には人体埋葬を主眼とする陪塚が加わる。また、指標とした甲冑の副葬、埋納のあり方から、中型主墳・小型主墳・人体埋葬を主眼とする陪塚での副葬は、その被葬者に対するものであり、特定物品の埋納を主眼とした陪塚については、一部がその被葬者に、それ以外の多くが主墳の被葬者に対して行われたものと考えられる。

以上のように、両古墳群では、時期が下るにしたがってより下位の古墳にも甲冑の副葬が拡大するとともに、大型主墳に大量の甲冑が集中し、政権勢力内における格差が顕在化する。同時に、両古墳群での総体としての甲冑出土量が飛躍的に高まり、他の勢力との間に懸隔の差が生まれることになる。

（2）攻撃用武器の量と質にみられる格差

上記した甲冑の副葬、埋納にみられた推移は、刀剣を中心とする攻撃用武器についても同様のことが起こっていたことが予想される。古市古墳群を中心に、あらためてその内容をみてみよう。

大型主墳は、古墳群形成当初の津堂城山古墳の内容しかわからないが、当時の記録によれば、石棺外で 30 以上の刀、石棺内には剣が存在していたようである。不確実であるが、刀剣を中心に一定量の武器が副葬されていたことがわかる。

中型主墳では、盗掘をまぬがれた盾塚古墳と鞍塚古墳で、それぞれ刀 11・剣 10、刀 4・剣 2 の副葬がみられる。小型主墳では、珠金塚古墳（南・北槨）で、盾塚古墳や鞍塚古墳とほぼ同様の状況がみてとれる。ただし、2 体埋葬が想定されている南槨の場合には、その量を案分する必要がある。出土状況からみると、遺体に即して副葬された刀剣と、盾塚古墳と珠金塚古墳南槨では、棺外にこれを越える刀剣が副葬されていたことが注目される。このことは、さらに下位にあたる土師の里 8 号墳第 1 主体部でみられるように、刀剣それぞれ 1 が遺体の両側に即した状態で副葬されることが基本になっていたと考えられる。また、人体埋葬を主眼とした陪塚である高塚山古墳や長持山古墳では、中型主墳あるいは小型主墳に準じたあり方がみられる。これに加え、中型主墳である盾塚古墳の前方部埋納施設が同時期に設置された施設であるとすれば、出土した刀剣の量（刀 40•剣 15）から、中型主墳と小型主墳の間にも一定の格差が存在していたと考えられる。

そして圧倒的な量が、特定物品の埋納を主眼とする陪塚でみられる。同種の陪塚で、現在もっとも時期がさかのぼる西墓山古墳では刀剣 207、これに続くアリ山古墳では 85 以上、さらに野中古墳では 170 以上になっている。刀剣の内訳からみると、中期前半の西墓山古墳では刀 42、剣 165（内短剣 129）、中期半ばのアリ山古墳と野中古墳ではそれぞれ刀 77+・剣 8+、刀 154・剣 16+ となっており、その量が逆転して刀を主体とした構成になっている。とくに、アリ山古墳では、調査以前に抜き取られたとされる刀剣の量は、調査時の出土量に匹敵、あるいはこれを越えるものであった可能性が示されている。

このように、刀剣にみられる量的な格差は、鉄鏃の副葬、埋納量により鮮明に写し出されている。中型主墳・小型主墳・人体埋葬を主眼とした陪塚でみられる鉄鏃の数量は、珠金塚古墳北槨の 76 から盾塚古墳の 388 に対して、特定物品の埋納を主眼とする陪塚では、野中古墳の約 740、アリ山古墳の 1612 となり、西墓山古墳では埋納がみられなかったが、その格差は歴然である。特定物品の埋納を主眼とする陪塚が帰属する大型主墳のもとに、いかに多くの武器が集積されていたかを示すとともに、中型主墳の後退とともに、武器が大型主墳のもとに集約されていく過程がみてとれる。武器の所有、管理が政権勢力内の構造の推移と連動していたこと、また、指標として示した甲冑以上に、刀剣や鉄鏃を中心にした攻撃用武器のあり方にその実態がよりよく反映されている。

表１　古市古墳群主要古墳出土武器一覧

古墳名	施設	墳形	規模（ｍ）	埋葬・埋納施設	冑	甲	刀	剣	ヤリ	鉾	鉄鏃
津堂城山古墳		前方後円墳	210	竪穴式石室・長持形石棺	1	不明	30 数＋	1	不明		1+
盾塚古墳	後円部	帆立貝形古墳	73	粘土槨・割竹形木棺	2	1	11	10	－	－	388
	前方部			不明	－	－	40	15	－	6	－
高塚山古墳		円墳	約 50	粘土槨・割竹形木棺	－	－	8	15	3+	6+	191+
鞍塚古墳		帆立貝形古墳	48	粘土槨・箱形木棺	1	1	4	2	－	3	153
アリ山古墳		方墳	45	木棺直葬	－	－	77+	8+	48+	4+	1612
珠金塚古墳	南槨	方墳	27	粘土槨・割竹形木棺	3	4	10	10	－	－	250
	北槨			粘土槨・箱形木棺	－	1	2	3	－	－	76
野中古墳		方墳	37	木棺直葬	11	11	154+	16+	－	3	約 740
西墓山古墳		方墳	約 21	木櫃直葬	－	－	42	165	87	1	－
誉田丸山古墳		円墳	50	粘土槨・割竹形木棺	不明	1	不明				20+
長持山古墳	北施設	円墳	40	竪穴式石室・舟形石棺	1	2	3	1	－	1	254+
唐櫃山古墳		帆立貝形古墳	53	竪穴式石室・舟形石棺	4	2	●	●	－	－	●
土師ノ里８号墳		方墳	12	粘土槨・埴輪円筒棺	－	－	1	1	－	－	8
＊黒姫山古墳（参照）	前方部	前方後円墳	114	竪穴式石室	24	24	14	10	－	9	56

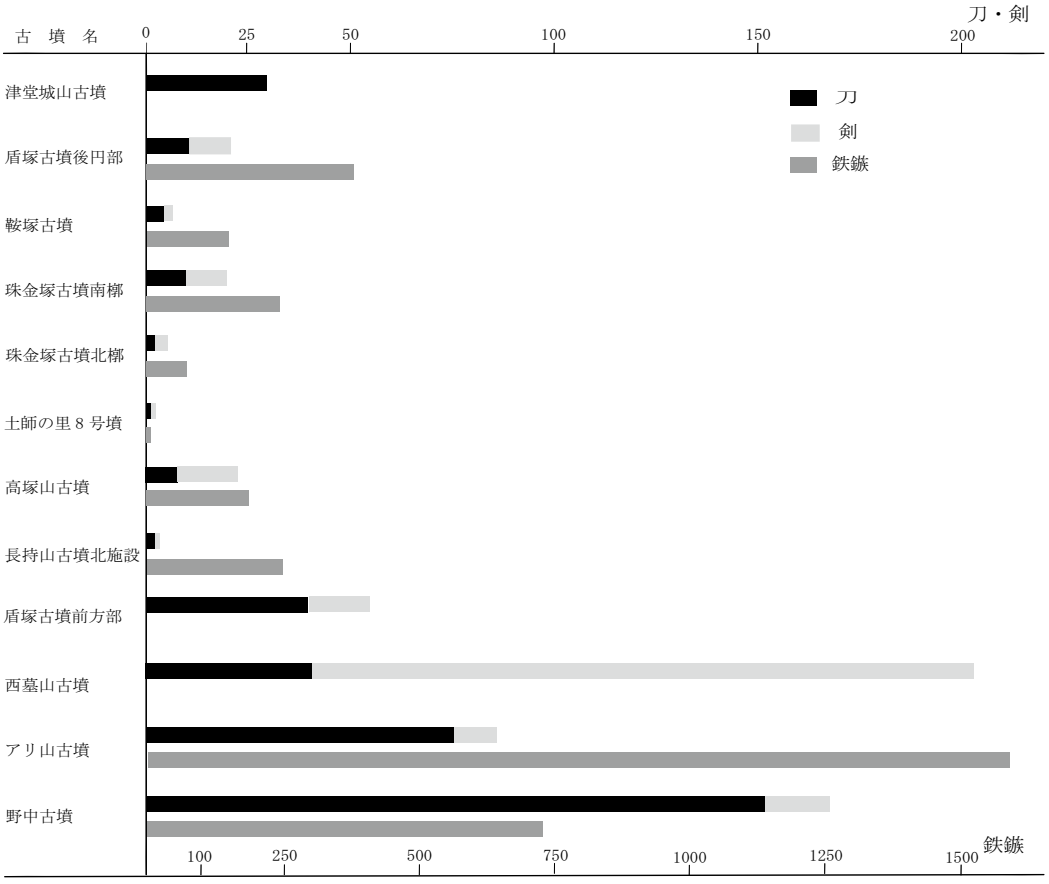


図９　古市古墳群刀剣鉄鏃出土量

以上でみてきた刀剣や鉄鏃の量に対して、質についてはどうであろうか。ここでは、刀剣の大きさを中心に、その規格についてみてみたい。もとより、その大きさだけではなく、刀であれば身幅や重ね（厚さ）などについて、剣についても同様の検討が必要であるが、多くは遺存状況が悪く、報告者によって数量に齟齬がみられることなどもあり、おおよその傾向をつかむことに努めたい。

まず、野中古墳の報告書に示された、古市古墳群の主要古墳で出土した刀剣の平均値をみてみると、刀では、最小値は中期前半の高塚山古墳で 66.5㎝、最大値は中期半ばのアリ山古墳の 103.3 ㎝となる。一方の剣は、最小値が中期半ばの野中古墳で 64 ㎝、最大値は珠金塚古墳北槨の 84.1 ㎝になっている。ここには掲示されていないが、中期前半の西墓山古墳では、刀（42）は 48 ㎝から 88.5 ㎝

表２　古市古墳群出土刀剣の比率及び全長平均

（『野中古墳の研究』より）

古墳名	出土数		剣／刀	全長平均値（cm）	
	刀	剣	×100	刀	剣
野中古墳	153	16	10.5	87.4	64
鞍塚古墳	4	2	50	73.85	67.7
盾塚古墳後円部	10	10	100	88.6	70.9
高塚山古墳	7	7	100	66.5	71.5
アリ山古墳	77	8	10.4	103.3	74.4
珠金塚古墳南槨	10	7	70	86.2	77.3
珠金塚古墳北槨	4	1	25	96.3	84.1
盾塚古墳前方部	40	15	37.5	—	—

で、平均値は 68.6 ㎝、60 ㎝から 77.5 ㎝の間に約 7 割が集中するという。一方の剣（36:短剣を除く）は、34.2 ㎝から 82.5 ㎝で、平均値は 58.5 ㎝、50 ㎝から 67.5 ㎝の間のものが比較的多く、刀剣ともに特定の範囲に収まる傾向がみられないという。一定数量以上の刀剣がみられる古墳では、あくまでも全体的な傾向としてではあるが、個体間に、刀では、40 ㎝近い開きがある西墓山古墳を除いて、おおよそ 20 ㎝前後の開きが、剣では 40 ㎝前後、60 ㎝前後、さらに 80 ㎝を越えるといった複数の区分がみられる。

さらに、上記の内容を絞り込むために、野中古墳の遺物第 1 列でみられた 10 組の甲冑それぞれに帰属したと考えられる刀剣 11 を取り上げてみたい。検出された刀剣 11 のうち 3 が剣で、この剣が武装具としては上位に位置づけられる、鉄地金銅張三尾鉄をもつ革製衝角付冑と三角板革綴襟付短甲のセットに帰属するとみられている。甲冑と刀剣は、それぞれ 10 組と 11 になっており、厳密には整合しない。さらに甲冑 1 組が遺物第 2 列に置かれており、埋納された 11 群の鉄鏃がこれに対応する可能性が考えられ、当時の武装の基本装備を示すものとして注目される。

それぞれの甲冑に帰属した刀剣は、剣が 65.2 ㎝・61.3 ㎝・65.5 ㎝で、刀は 81.1 ㎝から 97.4 ㎝になっている。これら刀剣にみられる違い、あるいは部位の差異は、上記した状況から、当該期にあっては一定の枠内に収まるものとみられていた可能性が高く、中期における刀剣の製造において許容された範囲であったことが想定される。また、この違いは、上記した古市古墳群の主要古墳でみられる刀剣のうち、刀については近似値となり、剣については 60 ㎝前後の枠に適合する。

これに関連する資料として、古市古墳群外であるが、甲冑 24 組が埋納されていた黒姫山古墳前方部竪穴式石室の刀剣がある。刀剣は、野中古墳のようにそれぞれの甲冑に帰属するのではなく、甲冑 24 組に対応するように、剣 10 と刀 14 が別にとりおかれていた。報告書で示された刀の大きさは 81.5 ㎝で、他もほぼこれに近く、一方の剣は、完形の個体は 35.5 ㎝と 32.2 ㎝である。本施設で出土した甲冑のうち襟付短甲は 1 で、野中古墳でみられたような帰属する甲冑の違いによる刀剣の区分は認められない。刀については野中古墳に比べ相対的に短く、一方の剣は 40 ㎝前後の範囲に入る。

さらに、被葬者が使用すると考えられるもっとも基本的な副葬である刀剣各 1 あるいは剣 1 という事例が、土師の里 8 号墳と鞍塚古墳の西方で検出された土師の里遺跡（Ⅴ区）木棺墓でみられる。前者の刀は 85 ㎝、剣は 73 ㎝　後者の剣は 68 ㎝である。

このように、古市古墳群で出土している刀剣は、現代的な視点でみる規格からは外れているが、刀については、これが両古墳群の勢力のもとで採られた規格のあり方であったと考える。一方の剣については、複数の規格が存在した可能性を考えたい。とくに、大量の刀剣が埋納されていた、特定物品の埋納を主眼とする陪塚では、中期前半の西墓山古墳段階でみられた刀の個体間の格差（48 ～ 88.5 ㎝）が、中期半ばのアリ山古墳や野中古墳では、全長が大きくなり、かつその格差が縮小していることが注目される。以上の事例を勘案すると、古市古墳群を構成する古墳に副葬、埋納された刀剣については、とくに誉田御廟山古墳以降に、一定の規格のもとに大量の刀剣が、鉄鏃なども含めて製造される体制が確立していたと考えたい。あわせて、中期の社会が前期のそれにまして、大量の武器を必要とし、急速な機能向上が求められたことを示している。

4．百舌鳥・古市古墳群の勢力を支えた中期新興中規模古墳群と初期群集墳

古墳時代中期には、百舌鳥･古市古墳群での武器の副葬、埋納に連動するように、武器の副葬に特化した中規模古墳群や一部の初期群集墳が出現する。ここでは、その代表的な事例として、桜塚古墳群東群と後出古墳群を取り上げ、前章で検討した古市古墳群の様相と比較してみたい。

（1）中期新興中規模古墳群の出現

中期前半、猪名川流域左岸地域に成立した桜塚古墳群東群は、甲冑を核にした組成として整った武器の継続した副葬によって知られ、ほぼ中期のうちに終焉を迎える。その首長墳は、径 56 mの円墳：大塚古墳→全長 55 mの前方後円墳：御獅子塚古墳→全長 30 ～ 35 mの前方後円墳：北天平塚古墳→径 20 mの円墳：南天平塚古墳へと、時期が新しくなるにしたがって首長墳の規模が縮小していくとともに、墳形が変化する。しかし、いずれの首長墳でも格差をもつふたつの埋葬施設が共通して設けられ、複数の甲冑を含む重厚な武器をもち、これに加えて御獅子塚古墳以降は馬具が伴う。

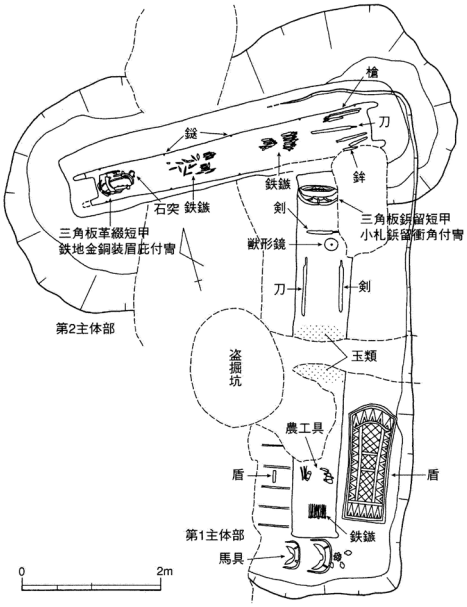


図 10　御獅子塚古墳埋葬施設
（『新修豊中市史』第４巻より）

また、各埋葬施設から出土した副葬品の構成は、時期を追うごとに武器の占める比率が高まる一方で、各種生産への関与を象徴する農工具をはじめ他の副葬品が減少し、武器に特化していく過程がみてとれる。とくに、中期後半の北天平塚古墳や南天平塚古墳の武器組成は、後述する移動や駐留に対応できる農工具が組み込まれたものになっていたと考えられる。

さらに、中期半ば以降、御獅子塚古墳第 1 主体部・同第 2 主体部、北平天塚古墳上層埋葬施設、南天平塚古墳 1 号棺、同 2 号棺（推定）で木棺に鎹の使用が認められ、北天平塚古墳では下層の埋葬施設で釘（鎹カ）の使用が報告されている。本古墳群でみられる武器に特化した副葬品構成は、鎹や釘の使用を介在させることによって、朝鮮半島東南部地域との継続した関係を導き出すことができる。

複数の甲冑の継続した副葬からわかるように、中期をとおして百舌鳥・古市古墳群の勢力と強い関係を維持した桜塚古墳群東群の勢力は、地域勢力の首長としての地位をもちながら、一方で、両古墳群の勢力のもとで、軍事上重要な役割を担ったことが考えられる。とくに、格差をもつふたつの埋

表３　桜塚古墳群東群出土資料一覧（狐塚古墳については首長墓として扱えるかは不明）

古墳名	墳　形	規模(m)	主体部	冑	甲	刀	剣	ヤリ	鉾	鉄鏃	弓	盾	馬具	鋤	手鎌	鎌	斧	鑿	鉇	錐	刀子	鎹	その他
大　塚	円　墳	56	西 槨	1+	1+	3	2+	－	－	37+	2	2	－	13+	7	21+	10	22		2	20+	－	－
			東 槨	2	3	10	8	3	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	鏡・櫛
御獅子塚	前方後円墳	55	第１主体	1	1	1	2	－	－	39	－	2	●	1		4+	3	10	－	－	3	12	鏡・玉
			第２主体	1	1	1	－	3	4	184	－	●？	-	－	－	－	－	－	－	－	－	10+	－
北天平塚	前方後円墳	30 ～ 35	上層	－	2	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	●	－	－	－	－	●	－
			下層	2	5	3	－	－	2	●	－	5	●	－	－	－	－	－	●		●	●？	－
南天平塚	円　墳	約 20	第１棺	－	1	3	●	1	－	●	3	－	●	－	－	－	●	－	－	－	●	●	鏡・三環鈴・櫛
			第２棺	1	2	1	2	－	1	●	●	●	●	－	－	－	－	－	●	－	－	●？	鏡・儀仗
＊狐　塚	不　明	不明	西 側	1	1	●	●	－	●	●	－	2	●	1	－	2	2	－	●	－	－	不明	－
			東 側	－	－	1	1	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	不明	鏡

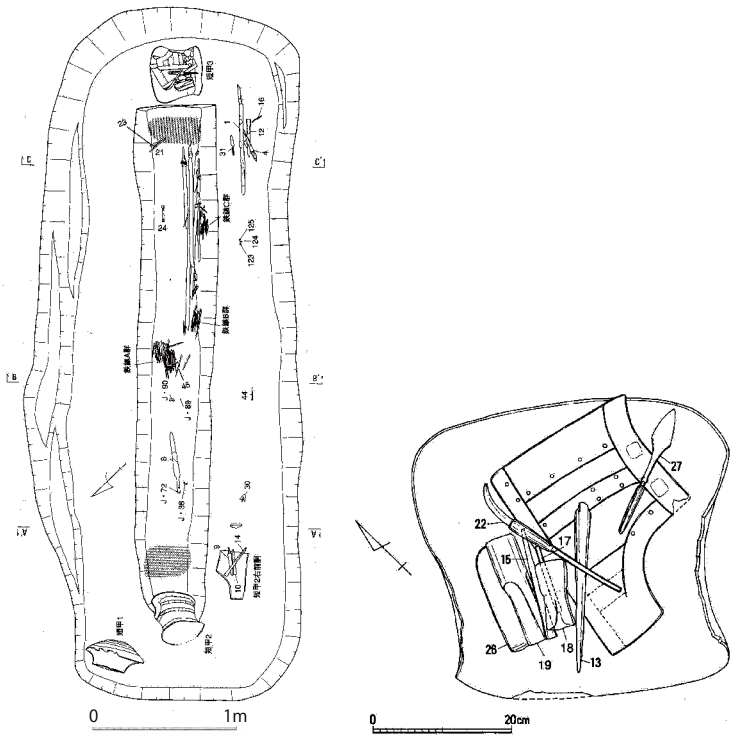


図 11　後出古墳群２号墳遺物出土状況および短甲内遺物（報告書より）

葬施設については、熊谷公男氏が埼玉稲荷山古墳のふたつの埋葬施設について、「一つの推測にすぎないが」という断りを入れた上で、主たる埋葬施設：粘土槨の被葬者を兄、鉄剣が出土した礫槨の被葬者を弟とし、兄が地域首長、弟が上番した「杖刀人首」とする想定が注意を引く。被葬者の親族関係については慎重でありたいが、きわめて興味深い指摘である。このような中期新興中規模古墳群は、他にも帯解古墳群や安養寺古墳群などをあげることができ、同様に百舌鳥・古市古墳群の勢力を武力をもって支えた勢力であったと考えられる。

（２）農工具が組み込まれた武器組成をもつ初期群集墳

一方で、中期半ば以降、後出古墳群のように短甲を核にした組成として整った武器の副葬に特化した初期群集墳が出現する。

ここで注目するのは、2 号墳と 3 号墳第 1 主体部でみられる武器と農工具の特異な出土状況である。2 号墳では、棺外南西小口におかれた短甲の中に右前胴部分をはずして入れ、さらに、鉾 2・鉄鏃 1 とともに大小の鉄斧各 1・鎌 1・鉇 1・鑿 1 が収められていた。また、同様の出土状況が 3 号墳第 1 主体でもみられ、短甲の中から鎌 1 と、鉄鏃とともに刀子 1 が出土している。また、短甲をもつ古墳では、古市古墳群の中期半ば以降にみられる刀剣に匹敵する、相対的に大きな刀剣をもつ傾向が認められる。短甲を装備する被葬者がもつ刀剣が、当時の古市古墳群でのそれに準じていた可能性が考えられる。

このような副葬品の構成と副葬状況については、時期が大きく下るが、養老律令軍防令備戎具条に示された律令軍の武装装備につうじるものがあるとする指摘がある。武器の中に組み込まれた少量の農工具は、遠距離、長期間の移動や駐留に対応するためのものであったという可能性である。中期半ばあるいは後半に出現する一部の初期群集墳の被葬者たちについては、当初から軍事構成員としての役割を担うために生まれてきた勢力であったと考えられる。

このように、百舌鳥・古市古墳群の勢力がもつ武力は、両古墳群のみによって構成されるのでは

表４　後出古墳群短甲出土古墳の武器・馬具・農工具一覧

号　数		短甲	刀	剣	ヤリ	鉾	石突	弓	鉄鏃	馬具	鋤先	鎌	斧	鉇	刀子	鑿	砥石
2 号墳		3	4	3	2	5		●	134			1	2	3	3	3	1
3 号墳	第 1 主体	1	1	2					21	●		1			2		
	第 2 主体	1	4	1	1			●	32						1		
7 号墳		1	4	6	2				171								

なく、その膝下に中期新興中規模古墳群や武器の副葬に特化した一部の初期群集墳の勢力を組み込んだ重層的な構造になっていたことが考えられる。また、この背景には朝鮮半島を対象にした、計画的で、長期間にわたる大規模な軍事活動の発動への対応が想定されていたものと考える。

５．古墳時代中期の日本列島を取り巻く東アジア情勢

369 年、朝鮮半島では、高句麗と百済との間で高まっていた緊張が軍事的衝突に発展する。このことを予測していたかのように、4 世紀半ばまでには、半島東南部地域の大成洞古墳群や福泉洞古墳群では甲冑や馬具を中心にした組成として整った武器の副葬がはじまっている。

前期後半、筒形銅器などの分布から導き出される、佐紀古墳群の勢力と半島東南部地域の勢力との間に成立した関係は、方形板革綴短甲を中心にした武器の副葬となって現出し、中期には百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとで、半島を対象にした計画的で、長期間にわたる大規模な軍事活動が展開されたと考える。さらに、後期前半、挂甲による武装装備の刷新によって、それまでに備蓄されていた大量の帯金式甲冑の廃棄、更新が図られるという劇的な変化がおこる。

この間にみられる武器の製作に伴う技術供与、急速な生産拡大に必要とされる大量の素材の恒常的な供給、また、考古学的な論証が難しいが、軍事組織の効率的な運営に欠かすことができない諸制度などの導入を含めて、とくに中期以降の政権勢力を急速に武装化させる必要があった加耶や百済地域の政権勢力の強い意図がその背景にあったことが想定される。このことこそが、百舌鳥・古市古墳群の勢力を胚胎させた大きな要因のひとつであり、これに対応することができた武器の開発、製造、さらにその運用が両古墳群の勢力の急速な成長を導いたと考える。

おわりに

本稿での検討は、武器を含む各種器物の副葬や埋納は、その行為自体は廃棄であるが、その廃棄が無作為にではなく、当時の社会状況を反映した一定の規範に則って行われたとの考えにもとづいたものである。一方で、武器として使用に耐えることができるかという疑問符がつく、いわば武器形鉄製品ともいえるような副葬、埋納品の存在が指摘され、また、帯金式甲冑についても象徴的な器物としてとらえようとする指摘もある。しかし、以上の検討からすると、とくに前期後半以降の武器は、実用性をもってその存在意味があり、またその推移は、「倭の五王」の中国への遣使を含め、列島を取り巻く東アジア情勢に連動する現象としてきわめて合理的に説明することができると考える。

【参考・引用文献】

天野末喜 1993「古市古墳群について」『新版古市古墳群』藤井寺市教育委員会
内山敏行 2006「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』第 7 号
岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館
河内一浩 2008「古市・百舌鳥古墳群の形成過程（1）古市古墳」白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』研究代表白石太一郎
川西宏幸 1988『古墳時代政治史序説』塙書房

北野耕平 1969「五世紀における甲冑出土古墳の諸問題」『考古学雑誌』第 54 巻第 4 号
北野耕平 1976『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室
熊谷公男 2000『大王から天皇へ』講談社
阪口英毅 2014「七観古墳の歴史的意義」『七観古墳の研究－ 1947 年・1952 年出土遺物の再検討－』京都大学大学院文学研究科
阪口英毅 2019『古墳時代甲冑の技術と生産』同成社
下向井龍彦 1987「日本律令軍制の基本構造」『史学研究』144 号
白石太一郎 2005『古墳と古墳群の研究』塙書房
鈴木一有 2014「朝鮮半島出土の倭系武装にみる日韓交流」『武器・武具と農工具・漁具－韓日三国・古墳時代資料－』「日韓交渉の考古学－古墳時代－」研究会
鈴木一有 2014「野中古墳の築造時期と陪冢論」『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学大学院文学研究科
関川尚功 1987「畿内中期古墳出土の鉄製農工具について」『横田健一先生古稀記念文化史論叢』上
十河良和 2008「古市・百舌鳥古墳群の形成過程（2）百舌鳥古墳」白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』研究代表白石太一郎
田中晋作 2001『百舌鳥・古市古墳群の研究』学生社
田中晋作 2003「古墳に副葬された武器組成の変化について」『日本考古学』第 15 号
田中晋作 2004「大阪府桜塚古墳群東群の被葬者集団がもった軍事的特質について」『地域と古文化』
田中晋作 2009『筒形銅器と政権交替』学生社
田中晋作 2016『古市古墳群の解明へ　盾塚・鞍塚・珠金塚古墳』新泉社
田中晋作 2017「古墳時代中期の鎧について－百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとに編制された軍事組織の特質－」『古代学研究』第 214 号
田中晋作 2018「今城塚古墳と新興中小規模古墳の動静」『橿原考古学研究所論集』17 号　八木書店
豊島直博 2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房
西川宏 1961「陪塚論序説」『考古学研究』第 8 巻第 2 号
西川宏 1966「武器」『日本の考古学　古墳時代（下）』河出書房
橋本達也 2014「中期甲冑の表示する同質性と差異性－変形板短甲の意義－」『七観古墳の研究－ 1947・1952 年出土遺物の再検討』京都大学文学研究科
橋本達也 2021「古墳時代における甲冑副葬の意義」『古墳文化基礎論集』
藤田和尊 2006『古墳時代の王権と軍事』学生社
藤田和尊 2019『古墳時代政権の地方管理経営戦略』学生社
山尾幸久 2003『古代の日朝関係』塙書房

刀剣からみた古墳時代中期の兵庫

渡瀬（わたせ）　健太（けんた）
（兵庫県立考古博物館埋蔵文化財課主任）

はじめに

兵庫県は、近畿地方の西端に位置する。東は京都府・大阪府、西は岡山県・鳥取県に接し、北には日本海、南には瀬戸内海・太平洋が広がる。古代には摂津、播磨、丹波、但馬、淡路の５か国に分かれており、大和や河内といった当時の中心地に隣接し、中国地方以西との往来の際には、避けて通ることのできない交通の要衝として古くから発展してきた。

１．刀剣類からみた兵庫県下における古墳時代中期の動向

同時期の畿内では、それまで奈良盆地東南部に集中していた大王墓が、盆地北部の佐紀古墳群へと移り、４世紀後半には大阪平野南部の百舌鳥･古市古墳群へと移動していく。また、その動きの中で、王権中枢部では、全長 400 mを超える巨大前方後円墳を頂点とした明確な階層構造が出現し、副葬品も、銅鏡や腕輪形石製品といった呪術的なものから、刀剣類をはじめとする武器・武具が主体へと変わっていく。

兵庫県下においても、播磨地域では、前期は主に西部の揖保川下流域と東部の加古川下流域で中・小型の前方後円 (方) 墳が連続して築かれてきたが、前期末に南東端部で県下最大の前方後円墳である五色塚古墳 (全長 194 m) が、中期初頭には中央南部の市川下流域で壇場山古墳 (前方後円墳、全長 147 m) が、中央部の加古川中流域で玉丘古墳 (前方後円墳、全長 109 m) が突如築かれ、揖保川下流域での前方後円 (方) 墳の築造が下火となる。また、加古川下流域では、中期に入った後も首長墓の築造は続くが､中期前半の行者塚古墳 (前方後円墳､全長 99 m) の築造を契機に墓域が移動し、以降の首長墓は帆立貝形古墳となる。さらに、前期には大型古墳がみられなかった但馬地域や丹波地域では、但馬南部において中期初頭に大型前方後円墳である池田古墳 (全長 141 m) が突如出現し、次いで非常に大型の円墳である茶すり山古墳 (全長 90 m) が築かれ、丹波中央部では中期中葉に全長 158 mの前方後円墳である雲部車塚古墳が築かれる。このように、県内各地で前期末から中期にかけて、王権中枢の動きに連動するように首長墓墓域の移動や墳丘の大型化が認められる。

古墳そのものの変化と連動するように、副葬品にも変化が生じる。県下における刀剣類の副葬は、前期には 88 例 210 点であったのに対し､中期には 141 例 445 点と倍増する｡多量副葬事例も増加し、10 点を超える刀剣類多量副葬事例は、前期では摂津地域西部の西求女塚古墳 (48 点出土)、夢野丸山古墳 (12 点出土) の２例に限られるが、中期に入ると、大型古墳を中心に７例に増加し、但馬の茶すり山古墳で 83 点、丹波の雲部車塚古墳で 45 点、播磨の宮山古墳 (円墳、径 30 m) で 42 点など、刀剣類の多量副葬が各地に広がると共に、その量も増大する。刀剣類が多量に副葬される古墳の被葬者は、王権にとって特別な地位にあったと考えられ、茶すり山古墳では襟付短甲、雲部車塚古墳では異形衝角付冑などの特殊な武具が共伴する。また、宮山古墳や行者塚古墳、同じく播磨のカンス塚古墳 (帆立貝形古墳、全長 30 m) では多数の刀剣類に加え、環頭大刀や垂飾付耳飾、帯金具、鏃などの渡来系遺物が複数出土しており、ヤマト王権が朝鮮半島とのつながりを有する首長に対しても厚遇していたと推測できる。

さらに、刀剣類出土古墳の分布をみると、そのほとんどが主要河川や後に官道となるルート沿いに集中することが指摘でき、ヤマト王権は武器・武具の配布を通じて、各地の首長を掌握することで、

交通路の確保を図ったものと考えられる。中でも多量に刀剣類が副葬される古墳は、いずれも主要河川と官道の結節点に位置することから、交通の要衝を治める首長に対しては特に優先的に武器・武具を配布したものとみられる。

このように兵庫県下においては、前期から中期にかけての王権中枢部の動きに連動して、首長墓墓域の移動や墳丘の大型化、刀剣類の多量副葬事例の増加が認められる。また、その分布傾向にみられるように、その変化の背景には、王権中枢の意向が強く反映されており、交通上重要な場所を治めていることや朝鮮半島との繋がりを持っていることなど、特定の強みを持った首長層への武器・武具の重点的配布を通して、地方支配の強化を図ったものと考えられる。

２．倭装大刀・剣の特徴とその性格

大陸の影響を受けて導入された刀剣類は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて列島社会に定着していき、中期には倭国独自の刀身・装具が成立、定型化していく。現在確認されている倭装大刀・剣のうち、その出現初期の事例で良好に観察できるものとして、中期前半に位置づけられる茶すり山古墳出土資料が挙げられる。

大刀をみると、把は木製で、把頭が刃側に突出する楔形を呈する。把頭の各面に直弧文が刻まれるものも確認できる。刀身と把は、茎を把の背側に彫られた溝に収める「落とし込み式」で装着され、グリップ部を「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」と呼ばれる特殊な紐を巻き付けることで、固定している。鞘も木製で、鞘身、鞘口、鞘尻で構成される。鞘身は二つの板材を貼り合わせることで作られており、両方の板に刃部を入れるための凹みを設けるものと、片側の板にのみ凹みを設けるものの２種類がある。鞘身の両端は一段低く削られており、そこに鞘口や鞘尻をキャップ状にはめ込む構造をとる。鞘口や鞘尻には漆が塗布され、直弧文や長方形文で装飾されるものもある。

剣は、大刀と同じく把・鞘ともに木製であるが、把頭は円柱状を呈し、把縁の片側に大きな突起をもつ。剣身と把は、茎を把縁側から挿入して収める「挿し込み式」で、グリップ部には刀と同じく「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」による把巻が施される。

茶すり山古墳の第１主体部は４つの区画に分けられているが、その副葬位置から刀剣の扱われ方をみると、遺体が埋葬された中央区画には直弧文などの文様が描かれた装具をもつ刀と剣がセットで副葬される一方、頭側の東区画では剣のみ、足側の西１区画では刀のみが副葬されており、遺体から離れるにつれて、文様はみられなくなる。このことから、被葬者との距離に応じて、文様の有無や刀と剣のセット関係などが明確に意識されていたことが分かる。

なお、茶すり山古墳出土の刀剣は金相学的に利器としての実用性に欠けるとの指摘があり、非実用的な「儀仗」もしくは副葬用の「明器」であった可能性が考えられる。刀剣類を大量に副葬するという葬送儀礼の進展に伴い、大量の刀剣が必要とされる中で、刀剣類の装具を含めた様式の定型化がより一層進むと共に、非実用的な刀剣も製作されるようになったとみられる。

このような「倭装」と呼ばれる刀剣装具は、古墳時代中期以降、全国各地で確認されており、王権中枢の有力者から地方豪族まで共有の様式を持つ。倭装大刀・剣は「倭国」に属するという共通のアイデンティティを客観的に示すとともに、その素材の違いや文様の有無、保有量によって、所有者の身分を表象するものとして利用されたと考えられる。

３．刀剣に残る有機質～二本芯並列コイル状二重構造糸巻き～

先述の通り、中期の刀剣の把には「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」と呼ばれる特殊な構造の

紐が使われている例が確認される。「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」は中期前半以降の刀剣の把で使用が認められ、現在茨城県、石川県、三重県、大阪府、兵庫県、奈良県、鳥取県、岡山県、福岡県、宮崎県の 10 府県で 100 例以上が確認されているほか、朝鮮半島においても出土例があるとの指摘もある。また、刀剣の把巻きは「把巻き紐あり」とのみ報告され、その構造について触れられていないものも多く、本来は全国各地にさらに多くの資料が存在することが予想できる。

外見上の特徴としては、紐と直交する方向に細かな筋が入り、断面には紐一本につき二つの空洞が並ぶ様子が観察でき、撚り紐や組紐、織紐などは全く異なる構造をもつことがわかる。兵庫県では、この紐について断面の薄片プレパラートを作り、その構造や素材について検討を行った。

横断面を顕微鏡で拡大すると、二本の芯となる繊維を別の繊維で８の字にたすきをかけるようにまとめ、更にその外側をコイル状に巻き付けて固定し、１本の紐を構成している様子が観察できる。これにより､肉眼観察で見えた二つの空洞はこの二本の芯が腐朽した痕跡であることが明らかとなった。さらに詳しくみると、芯材には断面形が不等辺三角形を呈する繊維が無数に確認できる。この繊維は断面形状から絹糸と判断でき、１本の芯材は約 1000 本の絹糸を束ねることで作られていることが判明した。なお、後の分析によって、外巻き糸にも絹糸が使用されていることが確認されている。このように詳細な観察・分析を行うことで、「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」は、高級素材である絹糸を多く用い、複雑な工程を経て作られる特別な紐であったことが明らかとなった。

「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」の出現は、先述した中期前半における倭装刀剣装具の成立と軌を一にしており、強い関係性が窺える。また、藤ノ木古墳や峯ヶ塚古墳などヤマト王権中枢に属する古墳や茶すり山古墳・雲部車塚古墳のような各地の上位首長墓からわずかな副葬品を伴うだけの小規模古墳まで、あらゆる規模・階層の古墳に認められ、きわめて広く用いられた把巻きであったといえる。ヤマト王権主導による鉄製武器・武具の大量生産・大量副葬が進展していく中で、高価な素材をふんだんに使い、複雑な工程を要して作られた「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」は、古墳時代中期に王権の影響下で成立した新たな刀剣装具様式を構成する重要な要素の一つであったと考えられる。

【主要引用・参考文献】
岩本崇 2006「古墳出土鉄剣の外装とその変遷」『考古学雑誌』第 90 巻第 4 号 日本考古学会
沢田むつ代 2008「古墳出土鉄刀・鉄剣の柄巻きと鞘巻き－織物などの種類と仕様－」『MUSEUM　東京国立博物館研究誌』第 617 号 東京国立博物館
島方洸一ほか編 2009『地図でみる西日本の古代　律令制下の陸海交通・条里・史跡』平凡社
豊島直博 2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房
中村有希・岡田文男・藤田淳・加古千恵子 2019「兵庫県向山・市条寺古墳群出土刀剣の把巻紐の材質調査」『日本文化財科学会第 36 回大会発表要旨集』日本文化財科学会
中村有希・岡田文男・片山健太郎・松木武彦 2019「岡山県勝負砂古墳出土大刀の把巻紐の構造・材質調査」『日本文化財科学会第 36 回大会発表要旨集』日本文化財科学会
兵庫県教育委員会 1999『向山古墳群　市条寺古墳群　一乗寺経塚　矢別遺跡』
兵庫県教育委員会 2010『史跡 茶すり山古墳』兵庫県文化財調査報告書第 383 冊

【挿図出典】
図１：筆者作成 (地図は国土地理院色別標高図を使用。官道については島方ほか編 2009 を参考とした。)
図２・３・５・７：兵庫県教育委員会 2010『史跡 茶すり山古墳』
図４：姫路市埋蔵文化財センター編 2016『国指定重要文化財　宮山古墳出土品』姫路市教育委員会
図６：兵庫県教育委員会 2002『入佐川遺跡』
図８：兵庫県教育委員会 1999『向山古墳群　市条寺古墳群　一乗寺経塚　矢別遺跡』
(8-7 のみ兵庫県教育委員会職員藤田淳氏作成。)

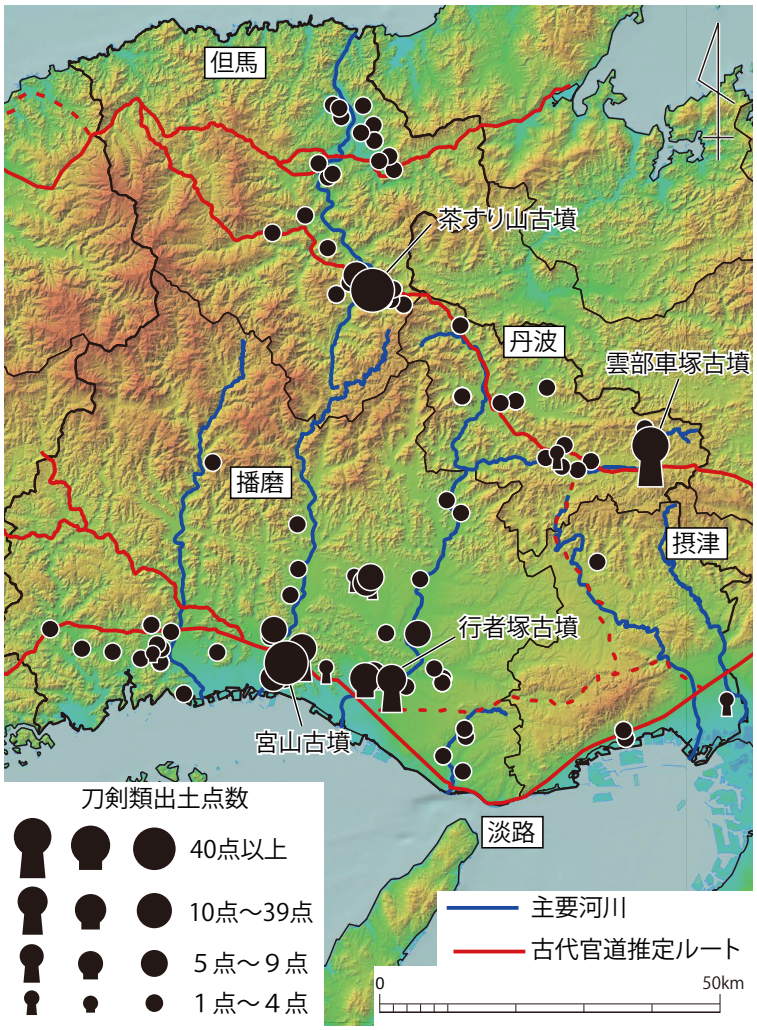
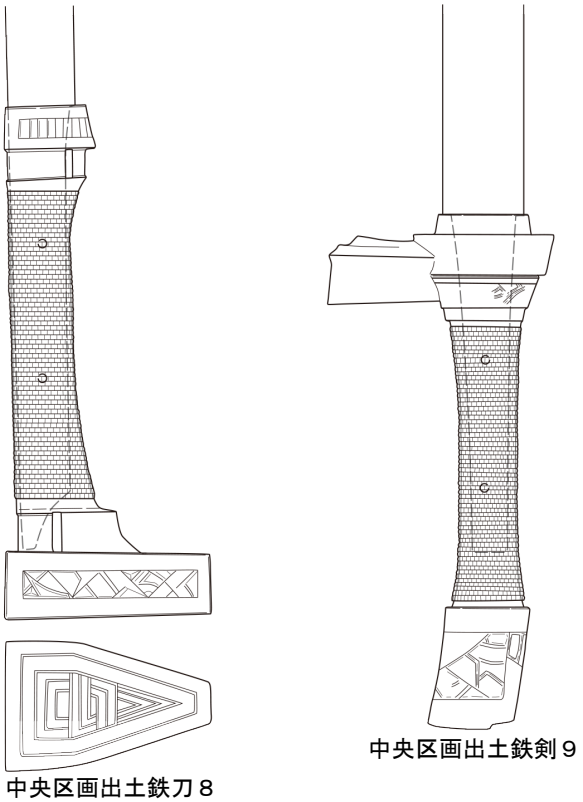


図１　兵庫県下における古墳時代中期の刀剣類出土古墳

図２　茶すり山古墳主体部出土遺物

図３　茶すり山古墳出土大刀

図４　宮山古墳出土渡来系遺物〈姫路市教育委員会蔵〉
（１～３：銀錯貼金環頭大刀　４～５：金銅帯金具　６～７：金垂飾付耳飾）



中央区画出土鉄刀８
中央区画出土鉄剣９
図５　茶すり山古墳出土倭装刀剣装具復元案

図６　兵庫県入佐川遺跡出土漆塗直弧文楔形把頭

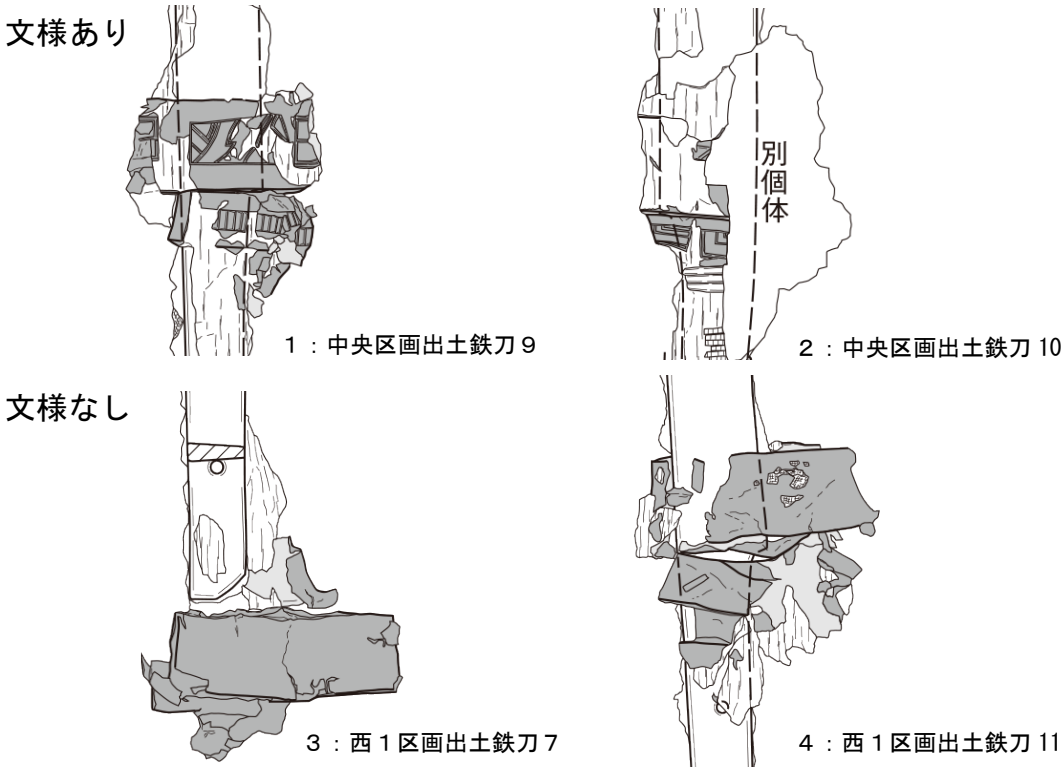


図７　茶すり山古墳出土刀装具の文様の有無

図８　二本芯並列コイル状二重構造糸巻きの構造
（１～２：向山５号墳出土短刀　３～４：向山５号墳出土短刀把巻き紐拡大　５：把巻き紐横断拡大
６：把巻き紐芯材拡大　７：二本芯並列コイル状二重構造糸巻き復元模型）

奈良県の動向

みずの　としのり
水野　敏典
（奈良県立橿原考古学研究所資料課長）

１．百舌鳥・古市古墳群の成立による影響

（１）首長系譜の墓域の移動があるか。

奈良県の大型前方後円墳の分布は、奈良盆地に集中しており、前方後円墳が出現した前期前半には、盆地の東側山地沿いに展開した大和古墳群、纒向遺跡内の纒向古墳群に集中した。最古相の前方後円墳である箸墓古墳（全長 280 m以上）を始め、全国でも最大規模の古墳が集中し、いわゆるヤマト王権の中枢があったと推定される。それが、前期後半に入ると奈良盆地北部の佐紀古墳群へと全長 200 m級の大型古墳の分布が移動する。さらに古墳時代中期になると、全国で最大級の大型古墳の分布は、大和川を下って大阪側の百舌鳥・古市古墳群へと移動する。その一方で、中期前半の奈良盆地内の全長 200m 級の大型古墳は、佐紀古墳群東群、盆地西部の馬見古墳群、島の山古墳（全長約 210 m）、盆地南部の宮山古墳（全長約 240 m）などに分散し、古墳分布にみられる勢力図は大きく変化する。

（２）墳丘の大型化

王権中枢の古墳として百舌鳥・古市古墳群を含めれば、仁徳天皇陵古墳など 400 m級前方後円墳の出現を見る限り、墳丘の大型化が進む。その一方で、奈良盆地内に限れば、200m 級前方後円墳の分布域は拡散するが、300 m級前方後円墳は姿を消し、墳丘の大型化は顕著でない。

（３）刀剣類の多量副葬

前方後円墳の出現期の桜井市ホケノ山古墳（全長約 80 m）において刀剣類は、剣、素環頭大刀、直刀、ヤリの合計 9 点以上が出土しており、被葬者の個人装備を超える量といえる。前期前半の天理市黒塚（全長約 130 m）では刀剣類は 34 点が出土し、前期中頃のメスリ山古墳（全長約 224 m）ではヤリ 212 点が出土し、前期後半のマエ塚古墳（直径約 48 m）でも剣・ヤリの出土が 100 点を超えている。大和では中期古墳の良好な調査例がないこともあるが、前期からなど多量に出土する傾向にあり、中期古墳の多量副葬の傾向は大型古墳では変化が目立たない。被葬者を囲んで護り鎮める刀剣類の副葬品としての性格は、メスリ山古墳副槨などの集積した副葬品配置の出現により、その性格を変え、被葬者の権威を誇示するものとして中期の刀剣類副葬へ引き継がれたものと考える。なお、小型古墳の造営が増えたことで、刀剣類の副葬量の増加は確実に確認できる。

２．刀剣類の生産

古墳時代に入り、弥生時代の出土量と比べて刀剣類の出土量は古墳副葬品として一気に増大する。古墳時代前期には、鉄素材とともに長大な刀剣は大陸からの輸入に頼っていたとみるのが有力な学説であり、古墳時代前期後半頃に生産が開始され、中期には日本独自の型式の甲冑（帯金式）や直刀（茎部尻の隅切りなど）の出土からも生産が開始されたと考えている。しかし、刀剣類を生産していたと確実に言い切れる遺跡は現時点で確認できていない。それは、刀剣類の未成品の出土がないからであり、決め手に欠けた状況である。

それを踏まえて、奈良県内の鍛冶関連遺物（鉄滓、鞴羽口、砥石等）と木製刀剣装具が出土する遺跡に、刀剣類生産の可能性を指摘したい。

○天理市布留遺跡

布留川沿いに位置する遺跡で、刀剣の木製装具が多量に出土している。特に直刀の楔形柄頭が特徴的である。ただし、埋没河道からの出土であり、個々の時期の特定が難しい資料が多い。古墳時代中期～後期にかけての資料を多く含む。また、地区を変えて同時期の鍛冶関連遺物である鉄滓や鞴羽口などが多量に出土している。注意すべきは、付近の埋没河道から木製刀・剣装具とともに刀形木製品が出土する点である。木製刀装具の出土は、単純に近接した木製装具工房の存在を示すというよりも、河道内に刀剣類を入れる祭祀的な行為があった可能性を示す。その上で、刀剣の木製装具の形態と構造は、古墳出土資料とほぼ同一であり、少なくとも、刀剣装具について正確な知識をもつものが居たこと、漆塗りや布巻の痕跡などの装着痕跡を持つものを含む点から、装具の付け替えが行われており、遺跡として刀剣類生産に関わった可能性をもつ有力な遺跡といえる。

○御所市南郷遺跡群

古墳時代中期後半から後期にかけての渡来系集団の集落とみられ、鍛冶関連遺物（鞴羽口、鉄滓）や特殊な金属加工工房の存在を示す銀滴、銅板などが出土している。刀剣類だけでなく、溶けて融着したガラス小玉や鹿角片も出土しており、多様な製品製作に関わる複合工房を備えた遺跡群とみられる。また、地区を異にして埋没河道からは木製刀装具や鞘が出土している。ここにも刀形木製品など祭祀的な雛形が出土するが、木製刀装具には部分的に黒漆が塗られており、布留遺跡と同様に、刀剣類生産の可能性を強くもつと考えている。

古墳時代中期から後期にかけての木製刀装具の出土は、奈良盆地内だけでも長柄遺跡、平城京下層など奈良盆地内でも多数確認されている。

○古墳時代前期の刀剣類生産の可能性を持つ遺跡

刀剣類生産を行っていた可能性の高い遺跡として中期以降の 2 遺跡を挙げたが、刀剣類の出土量の増加を顕著に示す古墳時代前期で、刀剣類生産の可能性が指摘される遺跡に、**福岡県博多遺跡群**がある。鉄器製作過程を示す鉄片 1000 点余りや、大型の鞴羽口とともに大型の鉄滓が多量に出土している。近年、全長 50cm を超える大型砥石や鍛状の鉄素材も確認され、注目される。刀子や鉄鏃などの小型鉄器の未成品はあるが大型鉄器の未成品は出土していなかった。しかし、大型砥石は小型鉄器の研磨には明らかに不向きな大きさで、より大きな鉄器を扱ったとみられ、刀剣類に関わる可能性が指摘されている。ただし、鍛冶炉などの遺構が残っておらず、砂丘上の遺跡であり、木製刀装具など有機質も出土していない。

博多遺跡群と類似する大型のカマボコ形鞴羽口の出土する遺跡は他にいくつか知られているが、その一つに**奈良県纒向遺跡**がある。鍛冶関連遺物の出土量は博多遺跡群と比べて少なく、鉄器生産の量的な評価は難しい。しかし、近年、漆塗りの木製刀装具の確認例とともに、鍛冶関連遺物の出土も増えており、中期の鍛冶関連遺物と木製刀装具の出土状況に近いものがある。鞴羽口の形態からも博多遺跡群との関連もうかがわれ、鉄器生産において一定の技術を持っていた可能性が考えられる。

また、纒向遺跡内のメクリ 1 号墳（全長約 28 m）周溝などから全長 30㎝を超える大型砥石が出土しており、纒向遺跡で大和古墳群に副葬された刀剣類が保管されていた可能性は極めて高く、多数の刀剣類を扱っていたことは十分に考えられる。

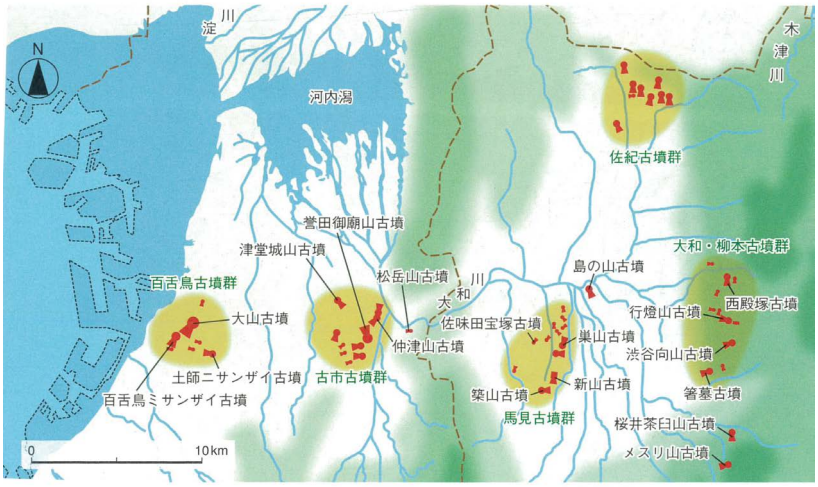


図１　近畿の古墳群分布図
（今尾文昭 2014『ヤマト政権の一大勢力―佐紀古墳群―』）

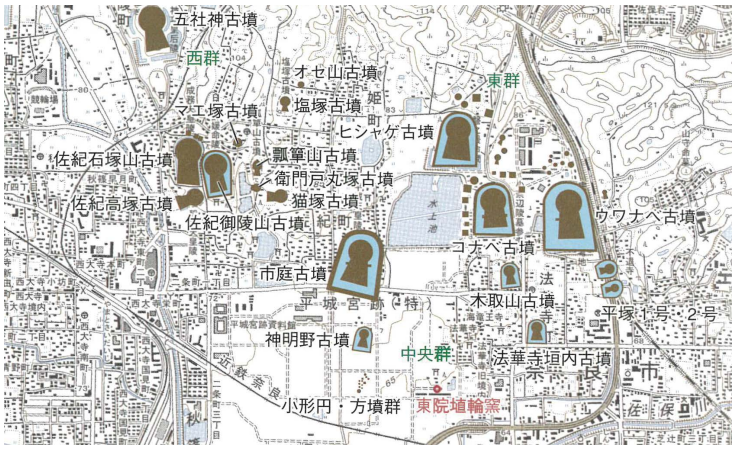


図２　佐紀古墳群の分布（今尾 2014）

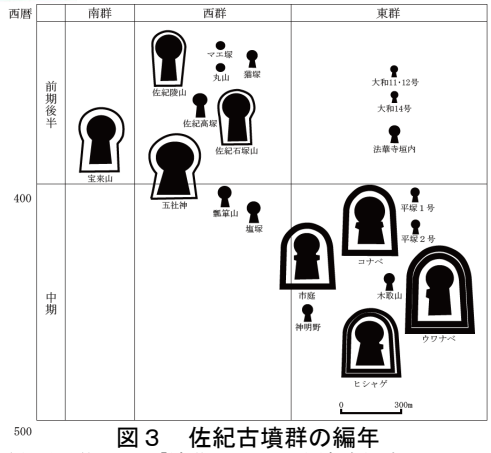


図３　佐紀古墳群の編年
（東影　悠 2013「墳墓から見た古墳時代成立過程」『新資料で問う古墳時代成立過程とその意義』より一部改変）

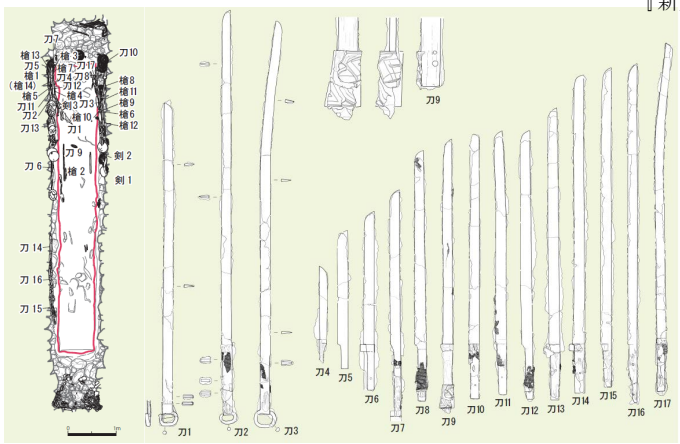


図４　黒塚古墳と出土刀剣（『黒塚古墳の研究』2018 八木書店）

図５　メスリ山古墳ヤリ（『巨大埴輪とイワレの王墓』2005 橿考博）

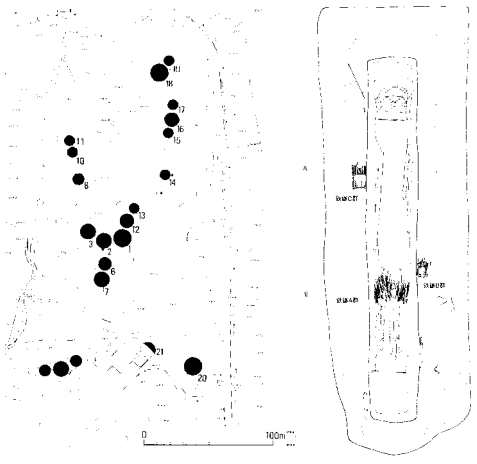


図６　後出７号墳埋葬施設と出土短甲と刀剣類
（『後出古墳群』1993 橿考研）

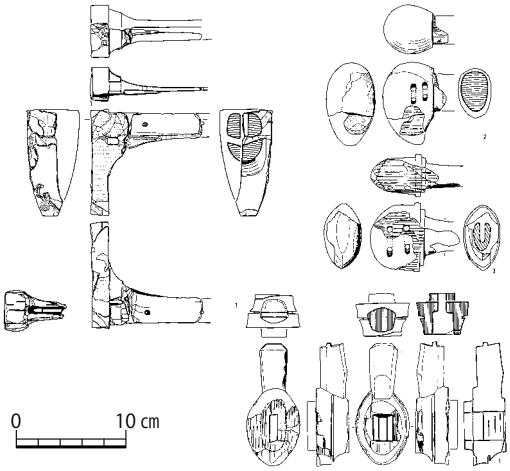


図７　布留遺跡木製刀剣装具（『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』天理大学附属天理参考館分室 1995）

図８　南郷遺跡群　鞴羽口と鉄滓、木製刀剣装具（『5 世紀のヤマト』橿考博 2013）
融解したガラス小玉・銀滴・銅製品

図９　博多遺跡群出土鍛冶関連遺物（『三国志の時代』橿考博 2012）

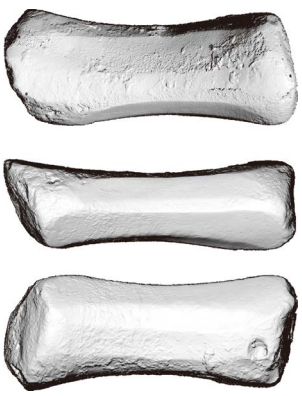


図 10　博多遺跡群大型砥石
3D 陰影図（全長 50.5cm）

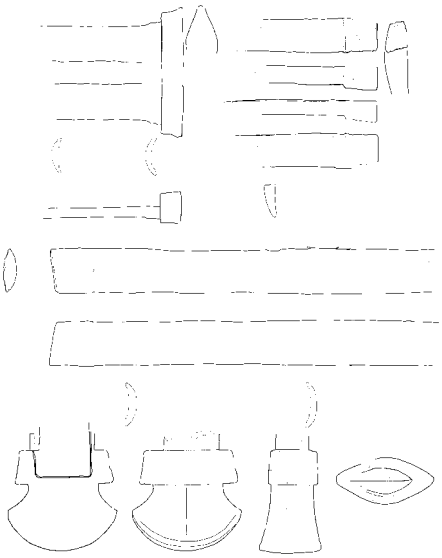


図 11　纒向遺跡 111 次木製刀剣装具（筆者作成）

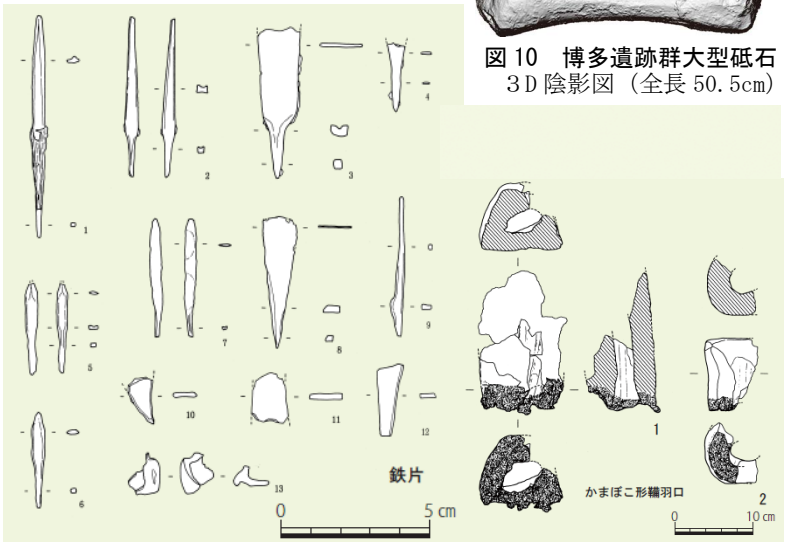


図 12　纒向遺跡 102 次　鍛冶関連遺物
（『奈良県遺跡調査概報』1998 橿考研）

佐賀県の動向

土井（どい）　翔平（しょうへい）
（佐賀県文化・観光局文化課文化財保護室主事）

１．百舌鳥・古市古墳群の成立による影響

（１）首長系譜の墓域の移動について

佐賀県域の古墳の分布は、古墳時代前期に北部玄界灘に面した松浦地域（図１　Ⅰ―１）で古墳の造営が集中し、唐津市の久里双水古墳（全長 108m）や伊万里市の杢路寺古墳（全長 80m）など地域の首長と目される前方後円墳が築かれる。一方、有明海に面する南部の佐賀平野では、古墳時代前期前半には一部地域にのみ古墳の造営が見られるが散発的であり、定型化した前方後円墳の出現が見られるのは古墳時代前期末から中期を待たねばならない。

古墳時代前期後半に南部の佐賀平野においても大型前方後円墳の造営が始まり、それに伴い首長系譜の墓域の移動が見られる。佐賀平野中央部（図１　Ⅰ―２）の金立銚子塚古墳の成立を皮切りに、全長 80 ～ 100m 級の前方後円墳の造営が連綿と続くようになる。

（２）墳丘の大型化

前述の通り、古墳時代前期に首長級の古墳が造営される松浦地域では、久里双水古墳や谷口古墳の規模から全長 80 ～ 100m 級の古墳が築かれる。造営地域が佐賀平野に移る古墳時代中期前後の首長級の前方後円墳の規模を見ると、前期末の佐賀市に築かれる金立銚子塚古墳で全長約 98m、中期の佐賀平野西部の首長墳と考えられる舟塚古墳で全長約 114m と墳丘規模の大型化という現象はみられない。

（３）刀剣の多量副葬

佐賀県域では古墳時代前期の段階で石室への刀剣類の副葬は１～３本程度にとどまるのが大半であるが、松浦地域に所在する谷口古墳では西石室で鉄刀１本と鉄剣５本、東石室で鉄刀 10 本以上、鉄剣１本、また経塚山古墳では鉄刀９本以上、鉄剣９本以上と卓越した量の刀剣類が確認される（図３）。古墳時代中期になり、刀剣類の副葬本数は前期と変わらず１～３本が主流である中、佐賀平野西部の首長墳である舟塚古墳の系譜に位置付けられる円山古墳では、鉄剣・鉄刀・鉄鉾合わせて 20 本以上が副葬されるなど、首長系譜の移動に伴い多量副葬も引き継がれている様相が認められる。しかし、首長系譜が移った後の松浦地域においても、唐津市の汐井川古墳 ST02 号墳や伊万里市の夏崎古墳で多量副葬は継続されている。

２．九州北部における外来的要素を持つ刀剣類

九州北部はその地勢的に大陸に近いことから弥生時代より交流が盛んであったことで知られる。古墳時代に入り継続して大陸との交流を続ける九州北部の各地域では、舶載品と見られる煌びやかな刀剣類が早い段階から見つかっている。以下に代表的なものを挙げてみる。

【環頭大刀】

刀剣類の装飾では柄頭部分に環帯を作り出す環頭大刀が代表的なものとして知られる。環頭大刀は弥生時代から日本列島にもたらされていたが、古墳時代以降は環頭内部に模様を作り出すものが多く流入するようになる。その中でも古墳時代中期に出現するのが、三葉文を用いた三葉環頭大刀である。九州北部は福岡県の若八幡宮古墳の副葬品（図４- １）に始まり、老司古墳第３石室副葬品（図４- ３）など初期の舶載品がみられる。

また、福岡県吉武遺跡 S-9 号墳副葬品（図４- ４）のように、環頭部分の装飾に金銅を用いる刀剣も存在する。吉武遺跡 S-9 号墳の金銅装龍文環頭大刀は、環頭部分から柄元金具にまで金板を被せており、製作技法から当時の朝鮮半島の加耶製であると考えられている。

【象嵌技術】

鏨で彫った溝に金線や銀線を埋め込み模様を描く象嵌技術を用いた刀剣は、古墳時代中期初頭には日本列島にもたらされており、刀剣の身部に刻まれた銘文に用いられるものなどが知られる。銘文を持つ象嵌大刀は、日本書紀に登場する七枝刀や、「典曹人」という当時の官職名を刻んだ熊本県江田船山古墳出土の銀象嵌銘大刀などに代表されるように、時代と当時の様相を語る貴重な文字資料としてその重要性が認識されている。

九州北部においては古墳時代中期に福岡県の久戸９号墳から出土した三葉環頭大刀（図４-2）の環頭部と三葉文部分に象嵌が用いられるなど、銘文以外にも象嵌を施した煌びやかな鉄刀が出土している。

【鉄矛（鐔付鉄矛・槍身鉄矛）】

刀剣のみならず鉄矛にも装飾が施された特異なものが出現する。佐賀県大日遺跡 ST2001 号墳から出土した鉄矛には、袋部の根元に鍔が装着されていた（鐔付鉄矛）。鐔付鉄矛は朝鮮半島に故地を求めることができるものである。また、佐賀県船石遺跡２号墳では、刀身部分が蛇行しており、袋部には槍を模した呑口を作り出し、さらに袋部と柄をつなぐ環状の目釘を施すという他では見られない独自の形態をもつ鉄矛もみられる。

３．横穴式石室の導入と刀剣類の関連

大陸と近接する九州北部においては刀剣類以外にも畿内地域と異なる独自発展をみせる要素として、横穴式石室の導入が挙げられる。九州北部地域の横穴式石室は、列島内で最も早く大陸の影響を受けて導入されることから、初期横穴式石室と呼称され、竪穴式石室に代わり次第に首長層の墳墓で主体的に用いられるようになる。このような経緯から初期横穴式石室は豊富な副葬品が伴う事例が多く、その中には、福岡県老司古墳３号石室のように三葉環頭大刀が副葬されるものも散見される。刀剣類以外にも佐賀県横田下古墳では筒形銅器が副葬され、福岡県鋤崎古墳でも多量の刀剣類と共に舶載鏡が副葬されることからも、副葬品にも外来的な要素が持ち込まれる事例は見受けられる。

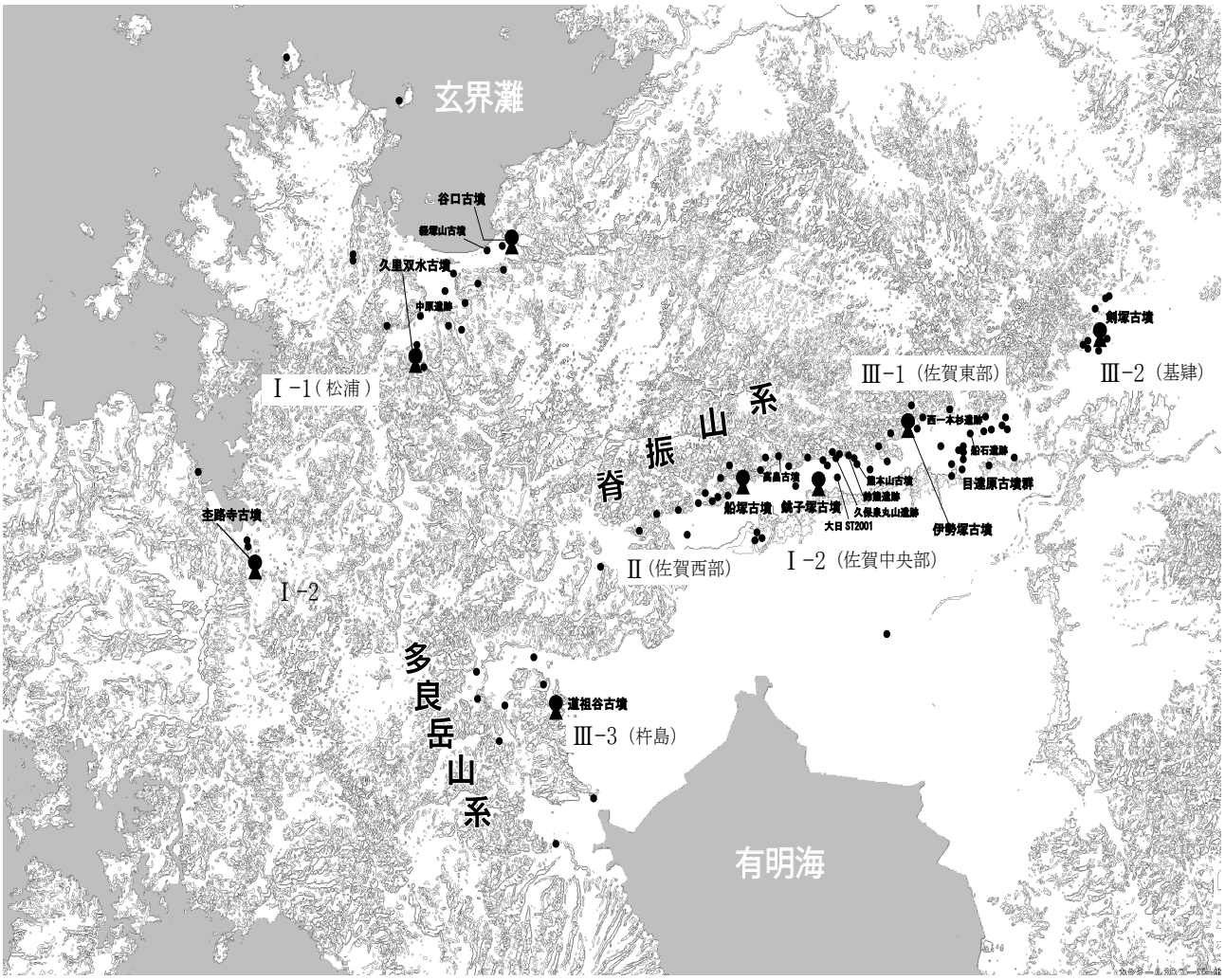


図１　佐賀県域の主要古墳の分布

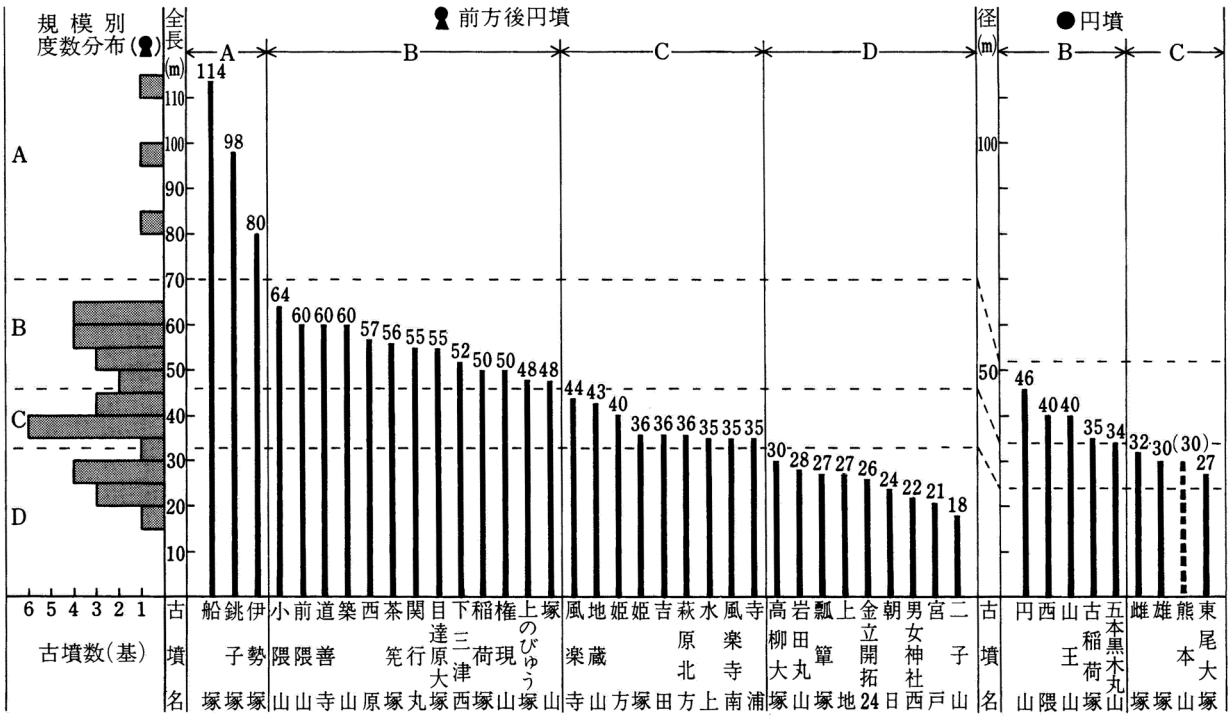
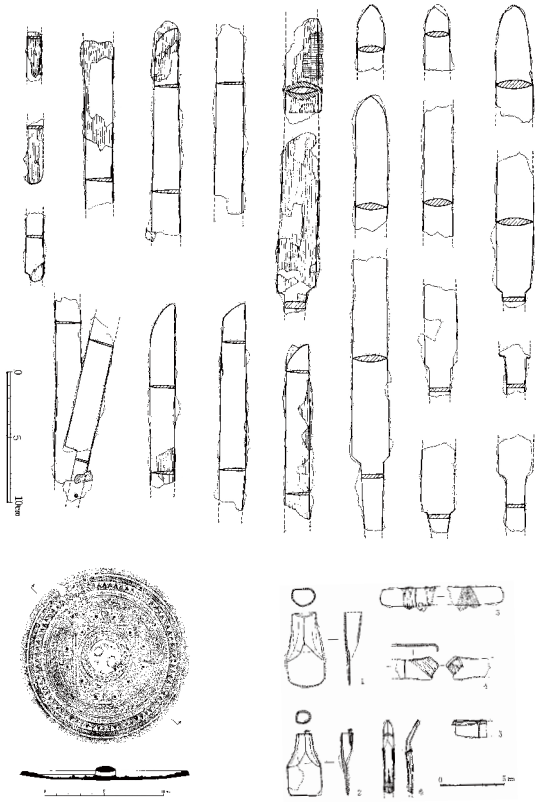


図２　佐賀県域の主要古墳の規模（蒲原 1995）　※規模は復元値を含む

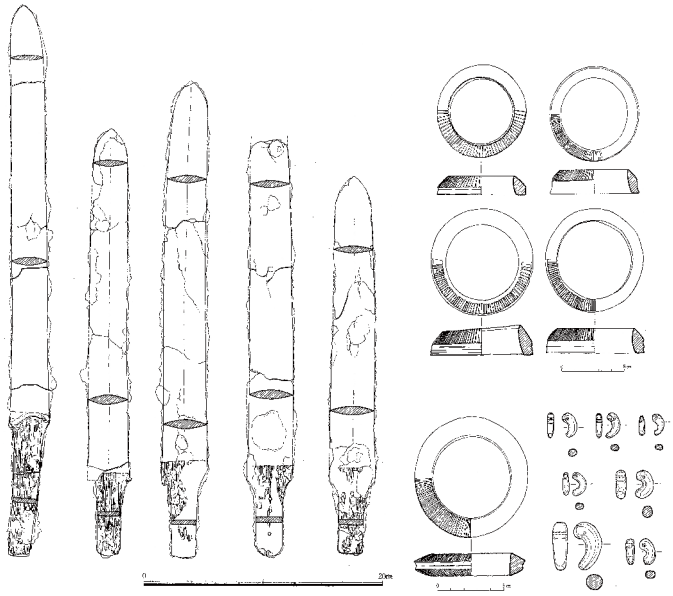


経塚山古墳

所　在：唐津市浜玉町大字浜崎　時　期：古墳時代前期
墳　形：円墳　墳　長：22.0m　石　室：竪穴式石室

副葬品：

鉄刀9以上、鉄剣５以上、鏡、刀子、鉄斧、ヤリガンナ、鎌



谷口古墳　後円部副葬品

谷口古墳

所　在：唐津市浜玉町大字谷口　時　期：古墳時代前期
墳　形：前方後円墳　墳　長：77.0m
石　室：竪穴系横口式石室（後円部）石棺墓（前方部）

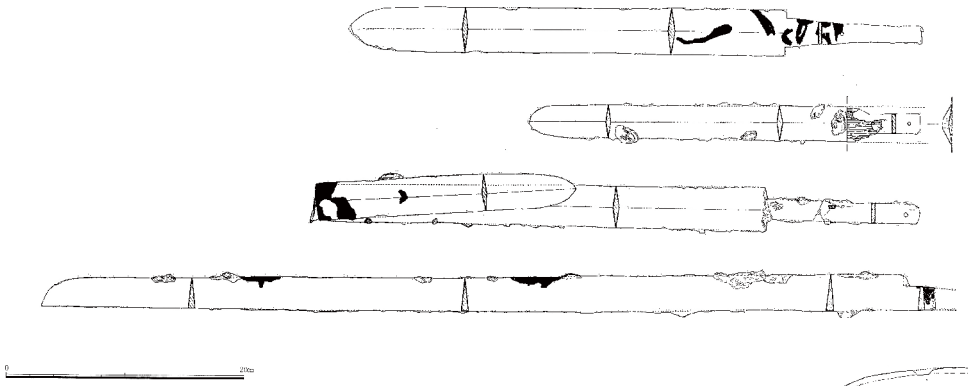
副葬品：

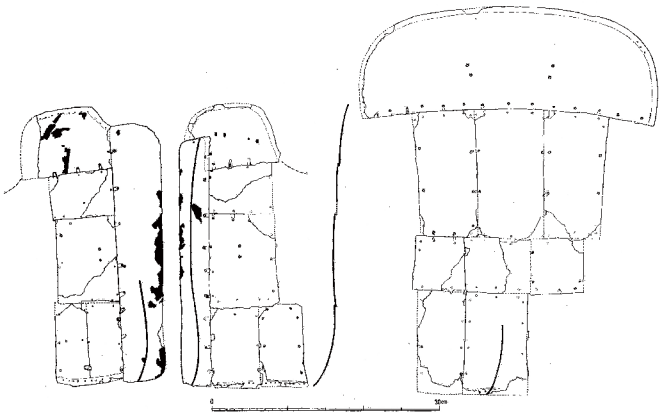
（西石室）
鉄刀１、鉄剣５（内１本ヤリか）、鉄鏃、鏡、耳環、石釧、竪櫛、鉄斧、鉇、鑿、鍾、鋸

（東石室 - 棺外）
鉄刀 10 以上、鉄剣１、鉄斧

（東石室 - 棺内）
鉄剣１、鏡、碧玉製釧、玉類

（前方部石棺）
鉄剣２、玉類





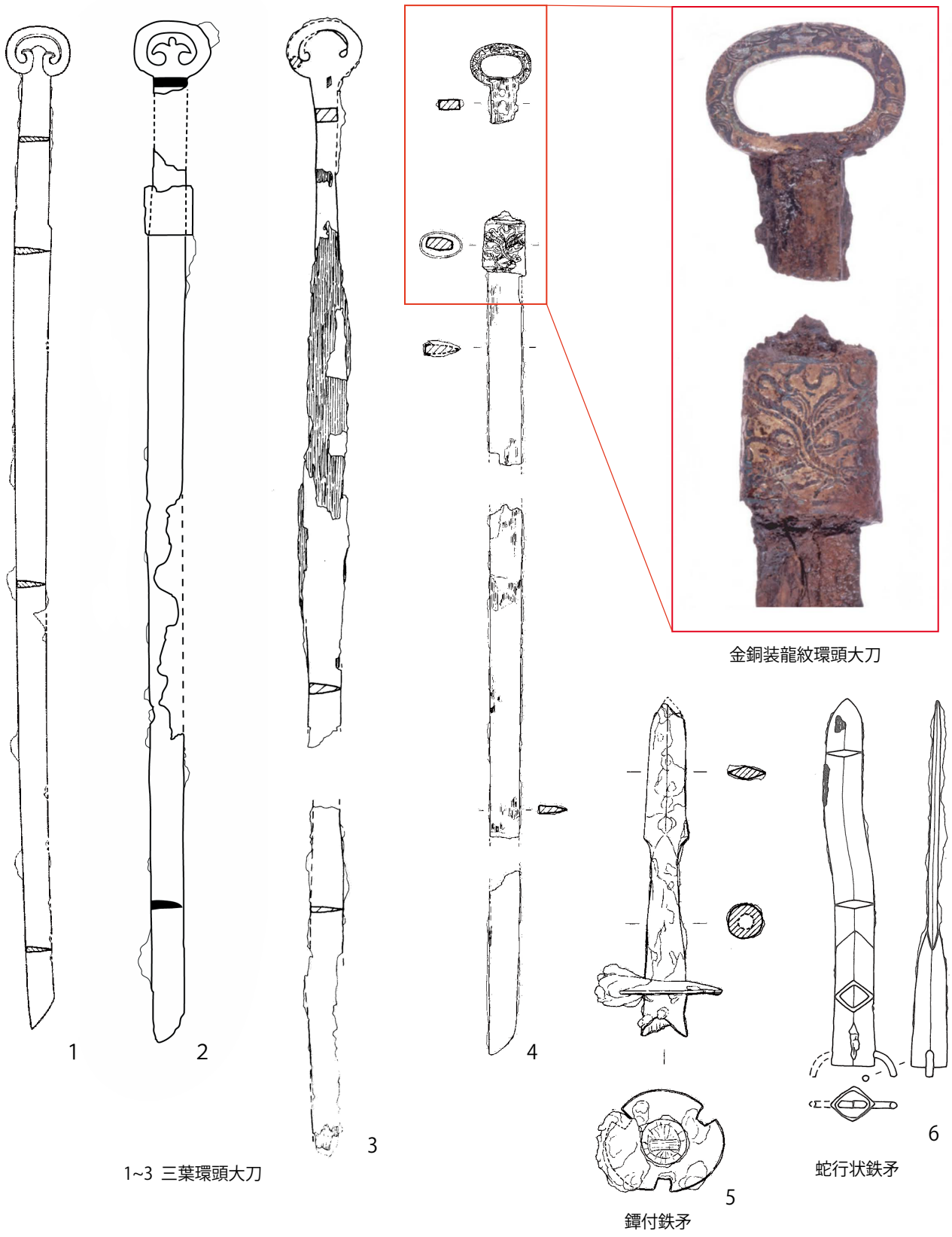
熊本山古墳

所　在：佐賀市久保泉町
墳　形：円墳？

副葬品：

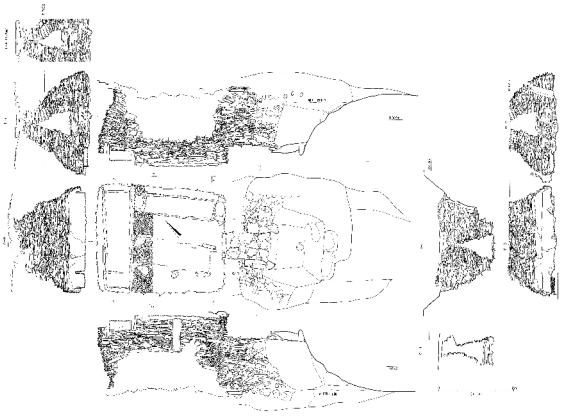
鉄刀1、鉄剣3、方形板革綴短甲、鏡、鉄針、ヤリガンナ、紡錘車、玉類

図３　佐賀県における古墳時代中期前後の刀剣類の副葬状況

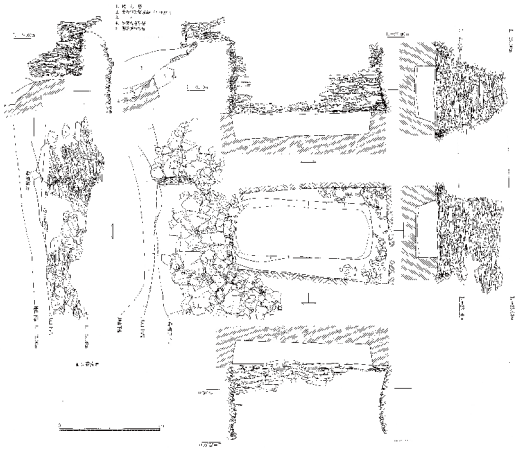


1: 若八幡宮古墳(福岡県)
2: 久戸9号墳(福岡県)
3: 老司古墳(福岡県)
4: 吉武S–9号墳(福岡県)
5: 大日遺跡ST2001号墳(佐賀県)
6: 船石遺跡2号墳(佐賀県)

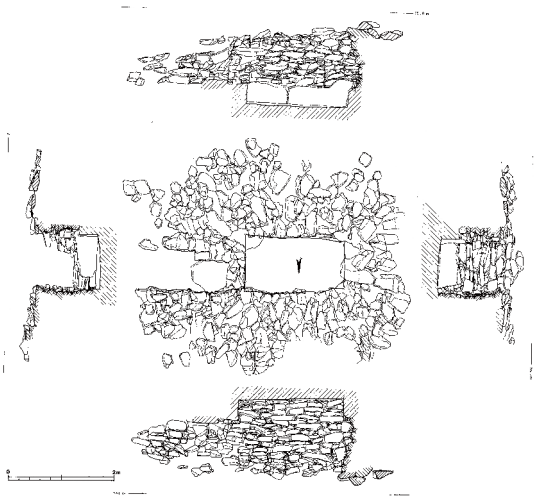
図４　九州北部にもたらされた外来的要素をもつ刀剣類



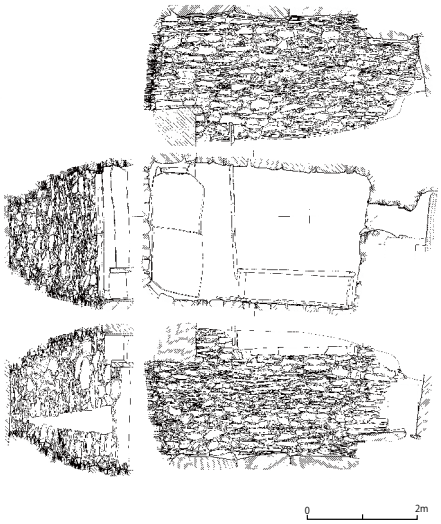
鋤崎古墳　(福岡県)



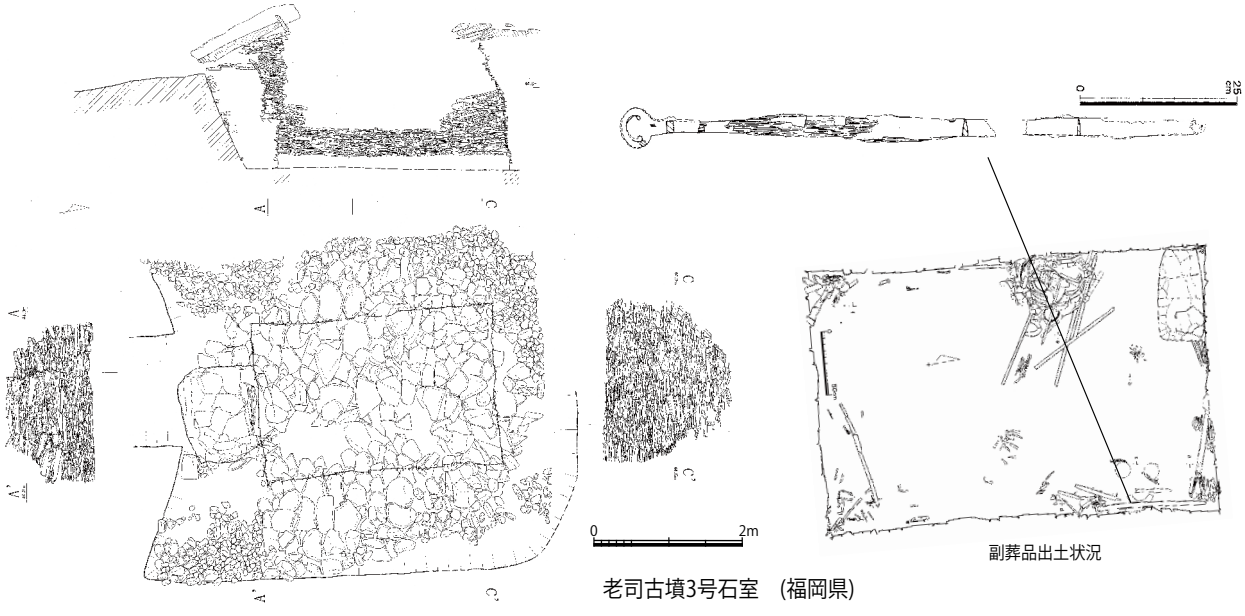
谷口古墳 西石室　(佐賀県)



双水柴山1号墳　(佐賀県)



横田下古墳　(佐賀県)



副葬品出土状況

老司古墳3号石室　(福岡県)

図５　九州北部の初期横穴式石室

宮崎県の動向

加藤　徹（かとう　いたる）
（宮崎県立西都原考古博物館学芸普及担当主査）

１．百舌鳥・古市古墳群の成立による影響

（１）首長系譜の墓域の移動

南部九州では、前期から中期にかけて、墓域の大きな移動はみられないが、広域盟主墳とされる巨大古墳に変化がみられる。前期には生目古墳群（宮崎市）において 100 m級の大型前方後円墳（１号・３号・22 号墳）が連続して築造されていたが、その後は、唐仁１号墳（鹿児島県東串良町）→男狭穂塚・女狭穂塚（西都市）→横瀬古墳（鹿児島県大崎町）→松本塚古墳（西都市）のように、志布志湾周辺（肝属平野）と宮崎平野の間で交互に広域盟主墳が築造されている。生目古墳群から唐仁１号墳への広域盟主墳の移動の背景には、畿内における百舌鳥・古市古墳群の成立との関係が想定されている。その一方で、唐仁１号墳・男狭穂塚は墳形や周溝形態が南部九州的であるのに対して、女狭穂塚・横瀬古墳は中期古墳的形態であるという違いがみられる。さらに、埴輪の焼成や製作の技法において、男狭穂塚の埴輪は「非畿内的」であるのに対して、女狭穂塚の埴輪は「畿内的」であり、そこには古市古墳群との関連性も想定されている。

（２）墳丘の大型化

南部九州では、広域盟主墳においては、中期前半の男狭穂塚・女狭穂塚において墳丘の大型化が顕著である。両古墳は、墳長 176 mの九州最大級の古墳であるが、その前後の時期の古墳（生目３号・１号墳、唐仁１号墳、横瀬古墳）は墳長 130 ～ 140 m級であり、男狭穂塚・女狭穂塚が突出した規模であることがわかる。しかし、男狭穂塚・女狭穂塚でみられる墳丘の大型化傾向は継続しない。

（３）刀剣類の多量副葬

県内では、南方 39 号墳（浄土寺山古墳）（延岡市）の 19 点、次いで西都原 170 号墳の 15 点の刀剣類の副葬があるものの、それ以上の数十点あるいは数百点となる多量の刀剣類を副葬する古墳は現在のところみられない。南部九州に特有の地下式横穴墓においては、六野原 10 号地下式横穴墓（国富町）のように 10 点を越える刀剣を副葬したものが存在する。

県内における刀剣類の出土量は、集成結果で 1056 点にのぼるが、半数を越えるおよそ 600 点が地下式横穴墓からの出土である。県内の古墳の多くは戦前に史跡に指定されており、これまで発掘調査がほとんど行われていない事を考えると、潜在的にはまだ多くの刀剣類が古墳に眠ったままであり、大型古墳、特に畿内との関係を強く示す女狭穂塚では多量副葬されている可能性は十分にある。

２．南部九州特有の墓制～地下式横穴墓～

（１）南部九州特有の地下式横穴墓

地下式横穴墓は、古墳時代中期以降に、小丸川流域以南の地域でみられる墓制で、その構造は図３例のとおりであり、朝鮮半島を経由してもたらされた横穴系墓制の一つと考えられている。玄室内に遺体を埋葬するが、単体では終わらずに、一度埋め戻した竪坑を再度掘り返して、追葬（多いものでは７人）を行うが、切り合いが稀であることや、同じ竪坑を掘り返すことから、地表には何らかの標識が存在したと考えられている。沿岸部では、古墳群と共存するものもあり、円墳の埋葬主体となるものもある。また、本庄 27 号墳（猪ノ塚）（国富町）や生目７号墳のように、前方後円墳の埋葬主体と考えられている例も少数であるが知られている。ただし、古墳に伴う場合でも、墳丘内に構築さ

れることはなく、周溝内に竪坑を掘り込んで、墳丘下に玄室を構築する点が特徴的である。

遺体を安置する玄室は、「平入り」型（玄室長辺に羨道が付く）と「妻入り」型（玄室短辺に羨道が付く）とに分類され、「平入り」型が一般的である。「妻入り」型は主に沿岸部の単体埋葬を行う墓に採用されており、西都原４号地下式横穴墓のように長大なものが目立つ。「平入り」型の副葬品は、格差があまり顕著ではないのに対して、これらの長大な「妻入り」型のものは、豊富な副葬品を有するものも多い。副葬される器種は、一般的には甲冑・刀剣類・鉄鏃といった武器・武具類が中心で、刀子を除けば、農工具類は少なく、軍事的な色合いが強い。

（２）刀剣に残った有機質

地下式横穴墓は、埋葬終了後に竪坑を土で埋め戻して密閉されるため、玄室内の温湿度は一定に保たれており、玄室床面が礫層の場合、副葬品が直接土壌に触れないため、島内 139 号墓のように非常に良い状態で残っている場合がある。刀剣類に関しては、鞘・把等の装具を中心とするが、その他にハエの囲蛹殻が残っている例もあり、製作技術だけでなく埋葬方法などについても知ることができる事例もある（図４）。

（３）特異な刀剣～蛇行剣～

「蛇行剣」は、剣身が屈曲した形状をした鉄剣を基本とするが、鉾（静岡県五ヶ山Ｂ２号墳・佐賀県船石２号墳）も含む。剣身の屈曲は３～４回を中心として、２～７回まで幅があり、また、屈曲の度合いにも強弱がある。概してそれほど高い規格性がみられないことから、単純な一元的生産の可能性は低いと考えられる。

出土遺跡の中心は畿内およびその周辺地域の古墳と、南部九州の地下式横穴墓である。ただし、蛇行剣が副葬される古墳は、基本的に円墳・方墳が中心であり、地方の前方後円墳からも出土するが、その数は少ない。畿内の前方後円墳としては、島の山古墳（奈良県）があるものの、前方部の埋葬施設からの出土である。南部九州で最も蛇行剣が出土している島内地下式横穴墓においても、甲冑等を有する有力層の墓域から外れた範囲の墓から出土している。地方の前方後円墳の位置づけについての検討が必要であるものの、総じて蛇行剣は最上位層の首長層が有する器物ではなかったようである。

【引用・参考文献】
犬木　努　2007「西都原の埴輪から見えてくるもの―カタチ・技術・工人・組織―」『図録　特別展　巨大古墳の時代―九州南部の中期古墳―』西都原考古博物館　44 ～ 48 頁
犬木　努　2015「西都原古墳群の埴輪―「平成調査」から「大正調査」へ―」『西都原古墳群総括報告書』宮崎県教育委員会　93 ～ 114 頁
東　憲章　2011「⑦地下式横穴墓」『古墳時代の考古学３　墳墓構造と葬送祭祀』同成社　160 ～ 168 頁
橋本達也　2012「①九州南部」『古墳時代の考古学２　古墳出現と展開の地域層』同成社　107 ～ 117 頁
柳澤一男　2019「古墳時代日向と宮崎市周辺の古墳」『生目古墳群と宮崎の古墳群』宮崎市教育委員会　86 ～ 92 頁

【挿図出典】
図１：柳澤 2019 図２および橋本 2012 図２を元に、改変作成。墳長は、各報告書および『前方後円墳集成』・『宮崎県前方後円墳集成』・『宮崎県史』等を参照
図２：地理院タイル「傾斜量図」を使用して、『前方後円墳集成』・『九州の横穴墓と地下式横穴墓』を元に作成
図３・５：各報告書より、改変作成
図４：立切４号・61 号地下式横穴墓出土品は高原町教育員会所蔵、島内 114 号地下式横穴墓出土品はえびの市教育委員会所蔵、その他資料は西都原考古博物館所蔵
図６：地理院タイル「傾斜量図」を使用して作成
図７：島内地下式横穴墓群報告書より、改変作成

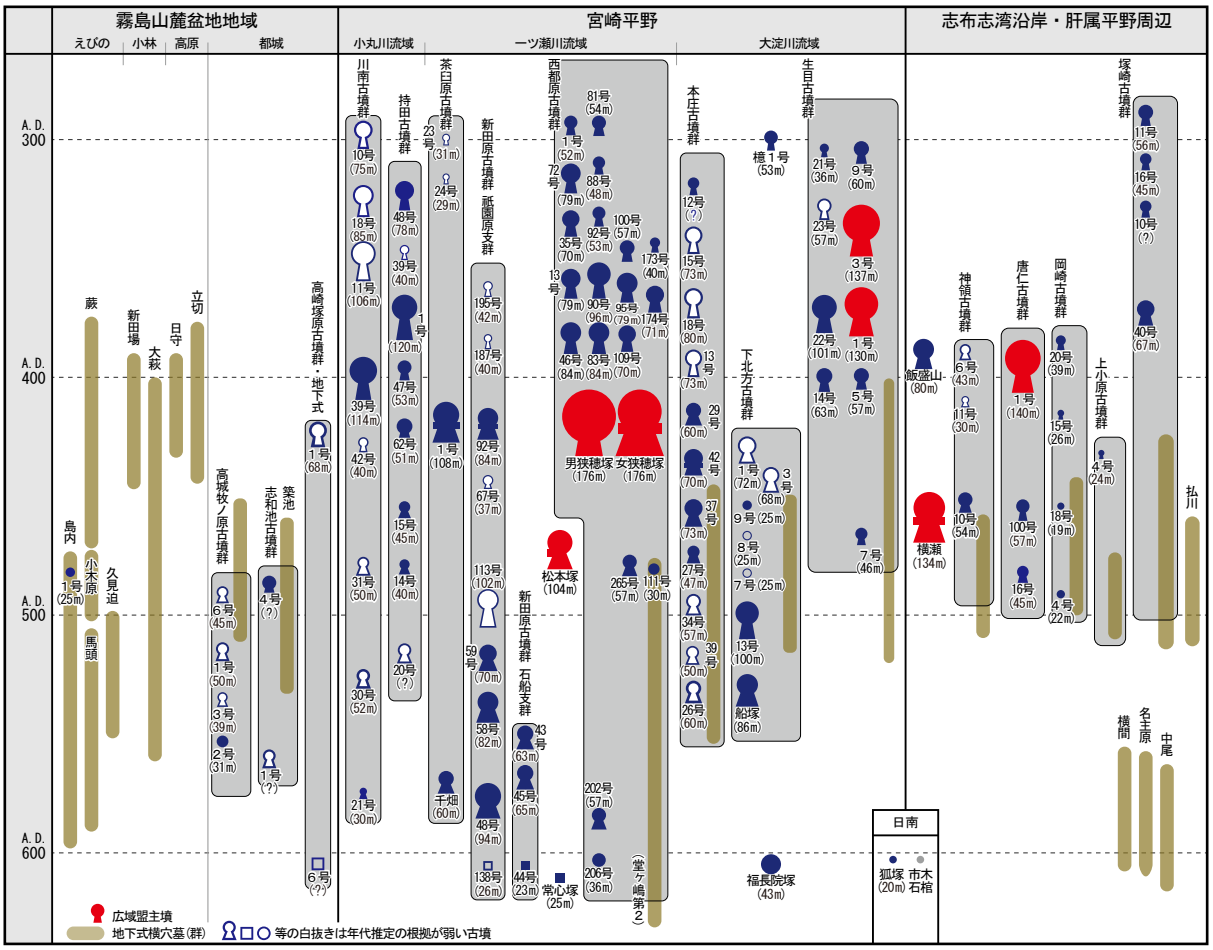


図１　南部九州の古墳・地下式横穴墓の編年

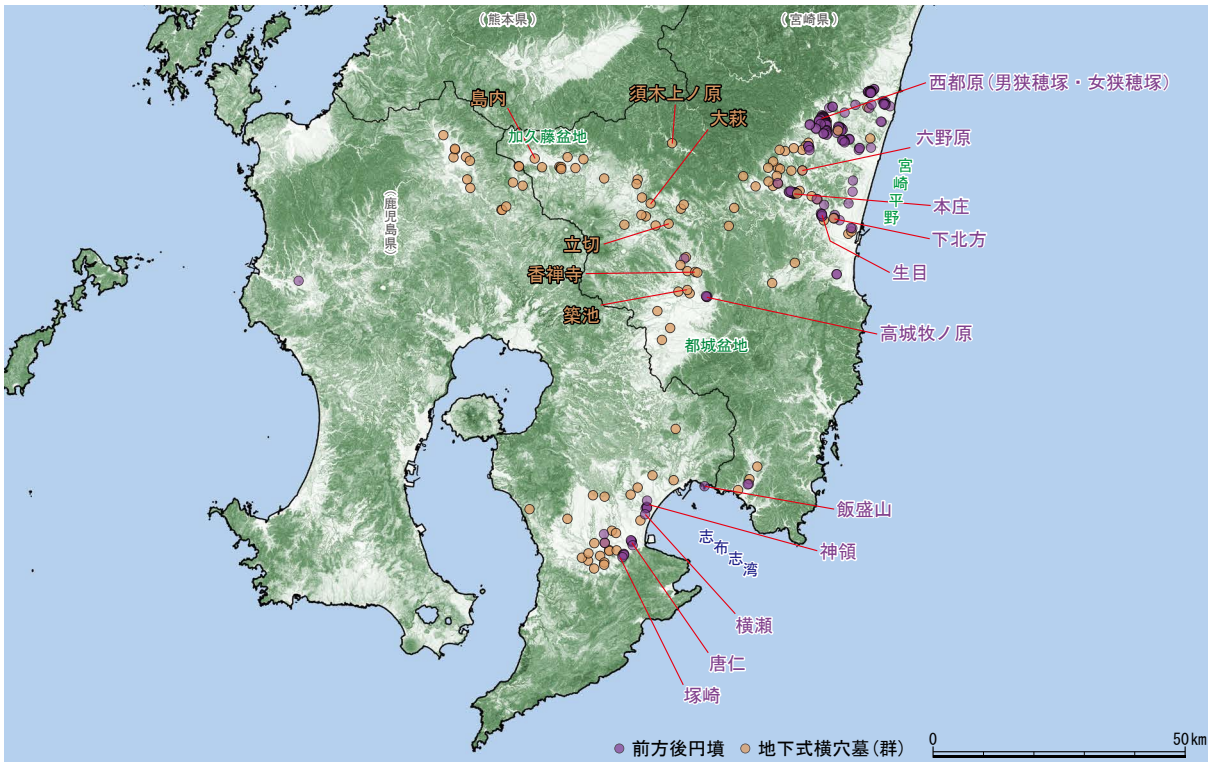
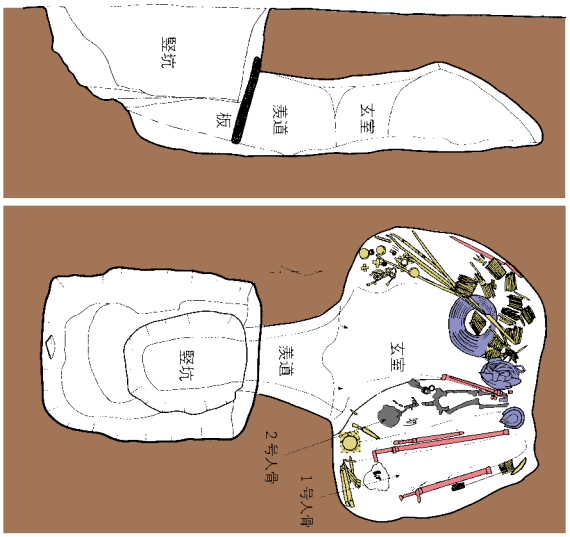
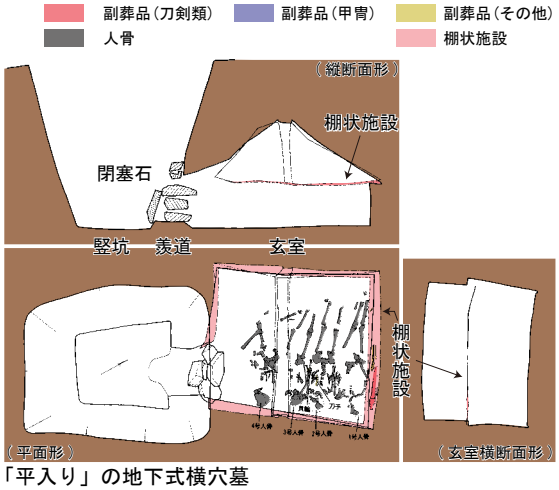


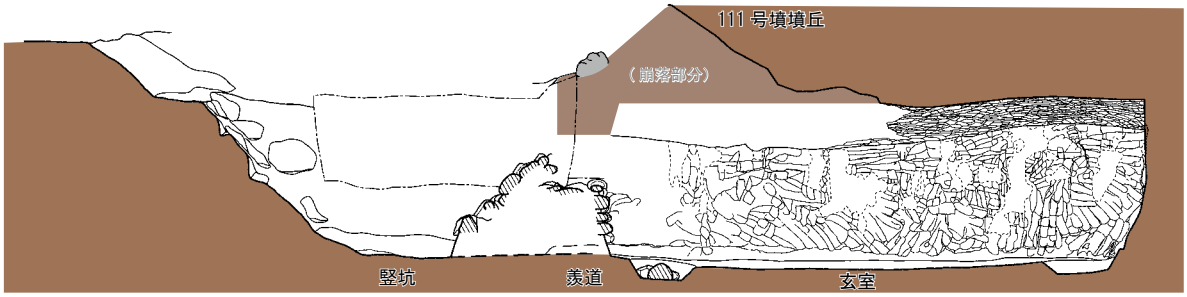
図２　南部九州における前方後円墳と地下式横穴墓の分布（S=1/1, 500, 000）

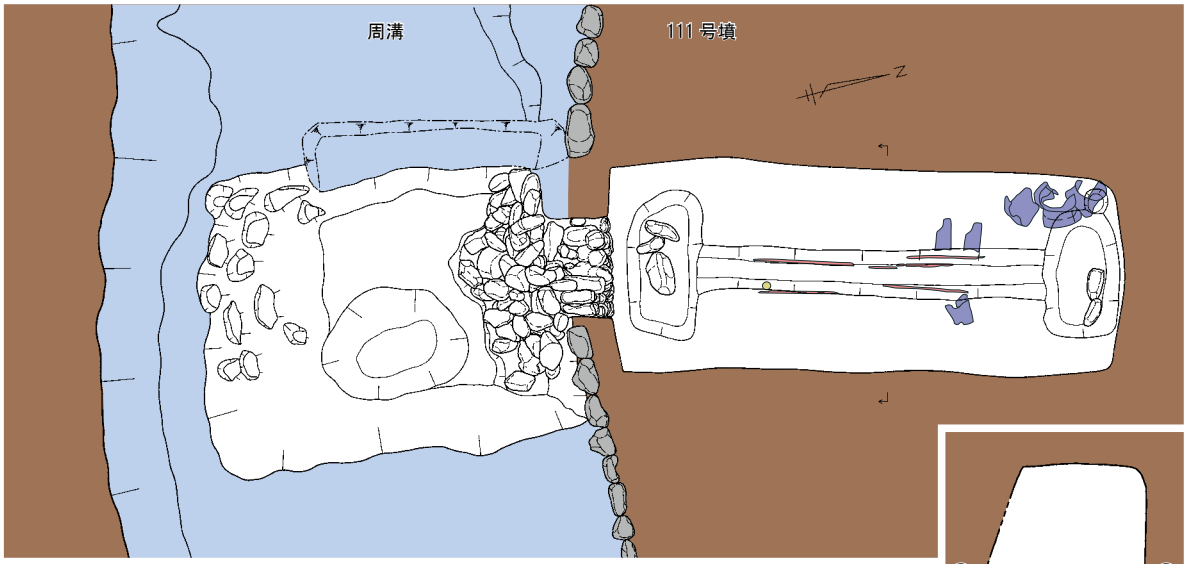


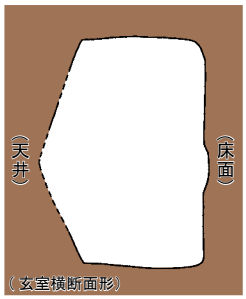
「平入り」の地下式横穴墓（えびの市 島内139号地下式横穴墓）



「平入り」の地下式横穴墓
（高原町 立切60号地下式横穴墓）







「妻入り」の地下式横穴墓
（西都市 西都原４号地下式横穴墓）

0　3m

図３　地下式横穴墓の諸例（S=1/80）

鉄剣鞘 組紐巻き（二条軸一間組）
（小林市 大萩３号地下式横穴墓）

鉄剣把 組紐巻き（三つ組）
（小林市 須木上ノ原９号地下式横穴墓）

鉄剣把 糸巻き
（高原町 立切４号地下式横穴墓）

鉄刀把 二種類併用巻き
（えびの市 島内114号地下式横穴墓）

把縁に直弧文の装飾が施された木製装具
（高原町 立切61号地下式横穴墓）

直弧文の装飾が施された鹿角製装具（小林市 大萩37号地下式横穴墓）

ハエ囲蛹殻
（都城市 香禅寺２号地下式横穴墓）
剣身と鞘に囲蛹殻がみられることから鞘をわずかに抜いた状態で副葬されていたことがわかる。
（茎部は欠損）

図４　地下式横穴墓出土刀剣類に残った有機質の諸例

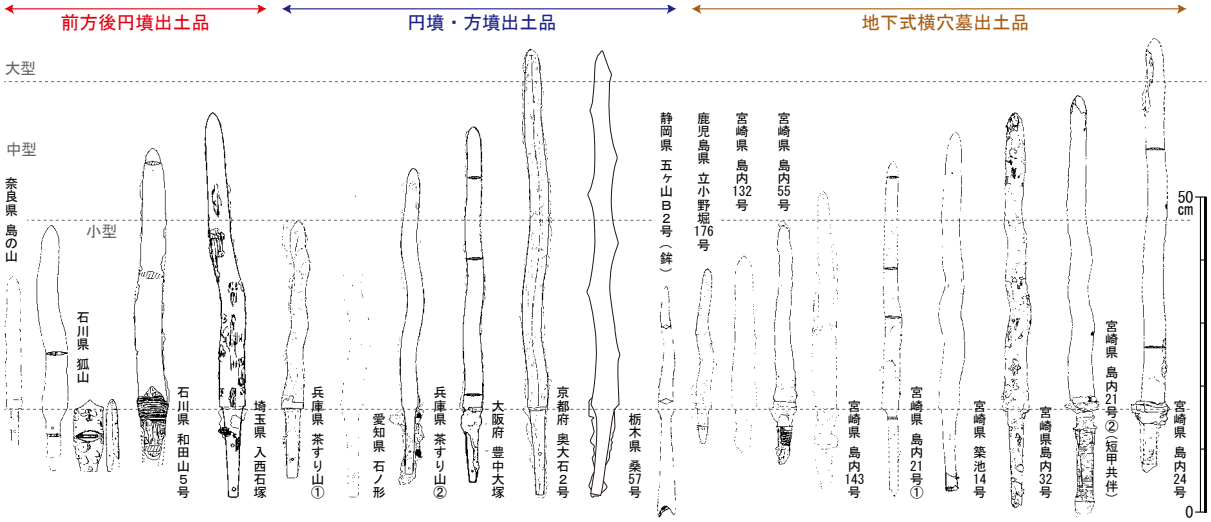


図５　蛇行剣の諸例（S=1/12）

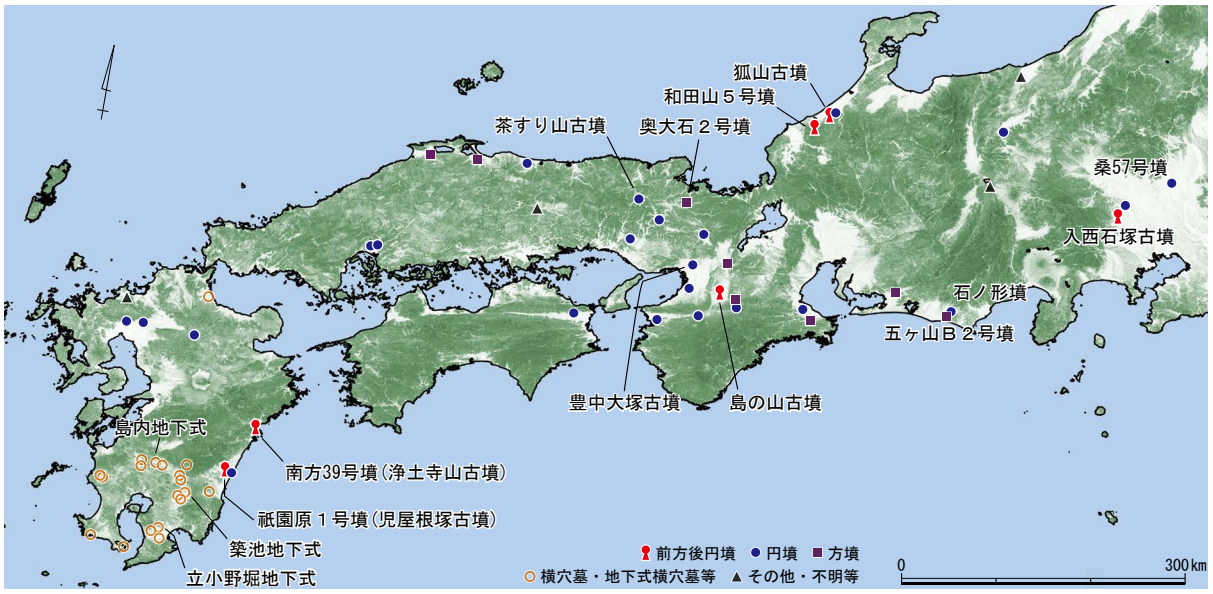


図６　蛇行剣出土遺跡分布図（S=1/8, 000, 000）

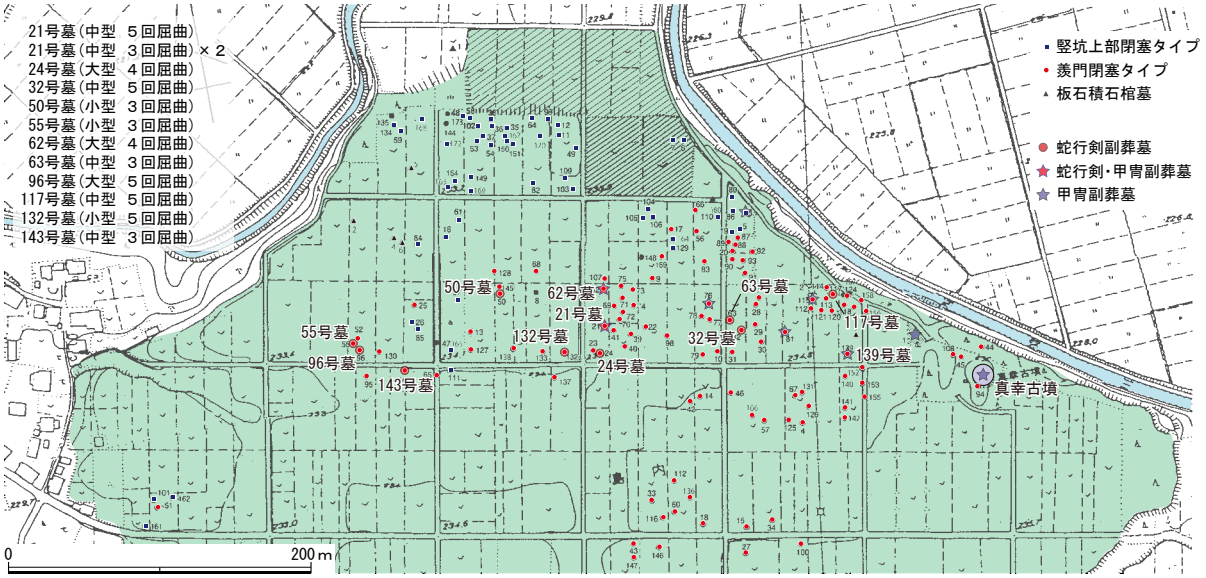


図７　島内地下式横穴墓群における蛇行剣等出土遺構の分布（S=1/5, 000）

古墳時代中期の刀剣にみる広島

尾崎（おざき）　光伸（みつのぶ）
（広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所主任学芸員）

１．古墳時代を特徴づける広島県の３つの地域

古代歴史文化協議会を構成する 14 県のうち、中国地方は岡山県・島根県・鳥取県と広島県の４県が参加している。この４県は互いに接しており、同じような地域と一括りにされることもあるが、古墳時代の広島県域は、他の３県とは異なる様相を呈している。

それを理解するためには、広島県域の古墳時代の様相については、次の３つの地域に分けて考える必要がある。

広島県は旧国名でいうと、西部が安芸国、東部が備後国である。このうち、備後国は、７世紀後半頃に吉備国を三分して、備中・備前国とともに造られた国で、平安時代の『和名類聚抄』では、備後国を「きびのみちのしりのくに」と読む。この備後国の南半の地域（以後,「備後南部地域」と呼ぶ。）は､備中･備前国と文化的には近い関係にある。また､安芸国南部（以後､「安芸南部地域」と呼ぶ。）は､現在の広島市などを流れる太田川流域や、その東の賀茂台地などを含む地域で、西部瀬戸内地域（山口県、愛媛県、大分県の沿岸地域）の影響が強い地域である。さらに、広島県北部地域は、日本海側に流れる江の川とその支流による浸食盆地が広がる地域で､出雲地域との結び付きが強い地域である。

以上のように、広島県域は、北・東・西にある大きな文化圏が交わっている地域で、「境目の地域」と呼ばれることもある。すなわち、同じ県でありながら、北・東・西では異なる様相を呈しているのが、広島県である。こうした様相は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて顕著だが、地域の違いを念頭に置きながら、古墳時代の刀剣のあり方について、概観してみたい。

２．広島県内の刀剣の出土状況

広島県で刀剣類が出土した中期古墳は 74 基にのぼる。その様相について、安芸南部地域、備後南部地域、県北部地域の順にみていきたい。

（１）安芸南部地域の様相

安芸南部地域は、太田川の河口に近い地域（広島市）の東・西岸に小規模な古墳が点在している。またその東にある賀茂台地の中央部の西条盆地（東広島市）には、広島県最大の前方後円墳、三ツ城古墳をはじめ、数多くの古墳がある。ここでは、刀剣類が出土した遺跡が比較的多い太田川流域の状況を取上げる。

この地域の前期から中期にかけての様相を見ると、古墳時代前期は、刀を副葬する古墳は確認されておらず、剣１本を副葬する事例が多い。また、この傾向は、墳丘の規模とは関係なく見られる。例えば、この地域の代表的な首長墓である神宮山第１号古墳（前方後円墳、全長 28 m）や宇那木山第２号古墳（前方後円墳、全長 35 m）でも、あるいは径 10 m程度の円墳の副葬においても、刀剣類の副葬は剣１本であり、墳丘が大きくても小さくても刀剣の副葬数は同じ状況である。

しかし、中期になると、刀１本が出土する古墳が 10 基、剣１本を副葬する古墳が９基で、その他に刀と剣を中心に２～３本複数する例が増えてくる。なお、この地域の中期の古墳では、刀剣が出土した 26 基の古墳からは、刀が 32 本、剣が 23 本出土しており、刀と剣は、同等かやや刀が多い傾向がある。

刀剣類が複数本埋葬された古墳の中で特徴的な例を見ていこう。

城ノ下第１号古墳は、長径 21 m、短径 14 mの長円形を呈する古墳で、主体部から、刀が３本、剣が１本、鉾が１本出土し、短甲や鉄製農工具類（刀子、鎌、鉇、鑿、錐、鋤先、斧）の他、金銅製垂飾や管玉、ガラス小玉が出土している。中小田第２号古墳は直径約 15 mの円墳で、刀５本と蛇行剣を含む剣３本と、冑、鎌、有棘形鉄製品（ヤスか？）が出土している。

こうした複数本の刀剣が副葬された古墳は、刀剣類以外に短甲や渡来系の遺物などを伴っており、このような文物を入手できる人物が埋葬されたものと考えられるが、古墳の規模はさほど大きくないのが特徴である。こうした様相は、前期とは異なり、古墳の規模よりも刀剣類の本数が被葬者の立場を表しており、この地域の古墳の特徴といえよう。

（２）備後南部地域の様相

備後南部地域は、確認されている前・中期古墳が少ないこともあるが、刀剣が出土する古墳が少ない。前期では、この地域では比較的規模の大きな古墳である石鎚権現第５号古墳（前方後円墳、全長 37.5 m）や石鎚山第１号古墳（円墳、径 20 m）のほか、径 10 m程度の円墳にも剣１本が副葬されているが、複数の刀剣類を埋葬した古墳は現在までのところ確認されておらず、安芸南部地域と同様、墳丘が大きくても小さくても刀剣の副葬数は同じ状況である。

しかし、中期になると、刀１本･剣５本･鉾４本･ヤリ４本の他、筒形銅器や短甲、盾、鏃、鎌、鑿、斧などの鉄製品が副葬された亀山第１号古墳（円墳、径 28.7 m）と、刀１本・剣２本・鉾３本、鉄鏃などが副葬された大元山第１号古墳（前方後円墳、全長 50 m）のような、比較的規模の大きな古墳に複数の刀剣類が副葬されている事例が見られるようになる。一方、径 10 ～ 15 mの円墳では剣１本または刀１本を副葬する傾向があり、墳丘規模が大きいほど刀剣類が多く副葬されていると言える。ただ、刀５本が副葬された国成古墳は径 13 mの円墳であり、この地域の同規模の古墳に比して格段に刀の出土が多い。こうした古墳は、現時点ではうまく位置づけることはできないが、墳丘規模や刀剣の副葬状況以外の要素を加味して考える必要があろう。

（3）県北部地域の様相

最後に、県北部地域、中でも現在の三次市、庄原市を中心とした備後北部地域の状況を見てみたい。

広島県内では、11,000 か所以上の古墳（前～後期を含む。）が確認されている。このうち、三次市で約 4,000 基、庄原市で約 1,500 基確認されており、特に古墳が集中している地域である。

この地域では、前期古墳で刀剣類が出土した古墳は１基のみで、全長 45.5 mの前方後円墳である大迫山第１号古墳では、刀・剣・ヤリが各１本ずつ出土している。墳丘規模が大きく、かつ刀剣類が数多く副葬されている状況であるが、墳丘規模と刀剣の副葬状況との関連については、全体的には事例が少なく、一般的な傾向を読み取ることはできない。

一方、中期では、この地域の代表的な首長墓である全長 40 m級の帆立貝形古墳に、刀剣の複数本の副葬が見られる。例えば、三玉大塚古墳（帆立貝形古墳、全長 41 m）では、刀２本、鉾４本が、八幡山第１号古墳（帆立貝形古墳、全長 45 m）からは、刀１本、剣１本が出土している。また、円墳でも径 20 ～ 30 m程度の中規模の古墳から、刀と剣１本ずつ、または剣２本といった複数本の副葬例が見られ、墳径が 10 m程度の小規模な古墳では、刀・剣どちらか１本が副葬されている。すなわち、墳丘規模が大きい古墳ほど刀剣類が多く副葬されるという傾向が見られる。ただ、曲第２号古墳（円墳、径 13.5 m）は、剣・刀・鉾が各１本の他、短甲や、鑿・斧・鏃・鎌・刀子などの鉄製品が出土しており、やや特異な例もみられる。

（４）まとめ

以上をまとめると、前期では、備後北部地域は不明だが、安芸南部地域・備後南部地域とも、墳丘

規模に関わらず刀剣類が１本程度の副葬で、大きな古墳だから刀剣類の副葬本数が多いといったようなことはあまり見受けられない。しかし、中期になると、備後南部・北部地域は、墳丘の大きさと刀剣類の多さが比例しており、墳丘規模と刀剣類の数が階層差を示していると言える。一方、安芸南部地域では大規模な古墳が造られない中で副葬された刀剣類の数に多少があり、刀剣類の副葬数から被葬者の立場、おそらくは軍事的な役割を読み取ることができそうである。ただ、どの地域にも、小規模古墳に多数の刀剣類を副葬した例があり、こうした古墳をどう位置づけるかは今後の課題である。

３．古墳時代中期の素環頭大刀

広島県からは、中期の素環頭大刀は３本しか出土していないが、そのうち２本が、やや特殊な事例のため、広島県報告の中で、14 県の素環頭大刀の状況を報告したい。

弥生時代中期後半に北部九州に導入された素環頭大刀は、古墳時代中期頃になると次第に副葬例が少なくなり、後期以降にはほとんど見られなくなる。これは、環頭部に様々な装飾等を施したものが増えることによるものと思われる。

素環頭大刀の時期ごとの形状の変化は、主に茎部に表れる。弥生時代の素環頭大刀は、多くが舶来品と考えられ、茎部は刀身と同じような幅のものが多く、関部は深く切り込まない形状のものが多い。また、環頭部は刀身と共作り（別材を使用せず，すべて同じ鉄素材から作られたもの）である。

しかし、古墳時代前期になると、茎部が環頭部に向かって細くなるタイプが見られるようになり、関部にわずかな段差をもつものが見られるようになる。出土例としては、奈良県の黒塚古墳や福岡県の一貴山銚子塚古墳出土のものが挙げられる。また，古墳時代中期には、茎部がさらに細くなるものがあり、関部も前期のものと比べて、より段差が強くなったものが出現する。14 県集成に基づいて、茎部の幅を前期と中期で比較すると、前期では茎幅は 2.1 ～ 3.1㎝で平均は 2.6㎝，中期は 1.6 ～ 2.5㎝で平均は 1.9㎝であり、茎部が細くなる傾向がうかがえる。この変化は、木製柄など、刀装具の変化に伴うものと考えられる。

また、中期頃から、環頭部と柄部、刀身の３つの部位を別に造り、接合したものが見られる。広島県で出土した素環頭大刀３例のうち、２例がこのタイプである。環頭部と柄部の固定は、鉄板２枚を貼り合わせた柄部もしく柄部の小口部分を割って、環頭部を挟み込んで鍛接したと考えられる。また柄部と刀身は、孔を開け目釘で固定している。その際、柄部、刀身とも、重ね合わせる部分は薄く仕上げ、そこだけ厚くならないような工夫が行われている。

なお、広島県で素環頭大刀が出土した３例の古墳のうち、上記のような別作りの素環頭大刀が出土したのは、安芸南部地域（広島市）の緑井大上第２号古墳（円墳、8.5 m）と備後北部地域（三次市）の門田敦盛第３号古墳（円墳、径７m）、また共作りの素環頭大刀が出土したのは、安芸南部地域（広島市）の地蔵堂山第１号古墳（方墳、短辺 14 ×長辺 17 m）である。さほど大きいとはいえない古墳から出土している点が特徴である。

これまで見たような別作りの素環頭大刀については、広島県以外の地域ではあまり見られない。その理由は定かではないが、環頭部のみを入手しそれを在地で接合して素環頭大刀に仕立てることが、当地域で行われた結果ではないかと考えられる。環頭部の切断は、倭装の木製把拵えの装着のために弥生時代後期以降行われているが、切断されたものがどう取り扱われたかを示す一例としておきたい。

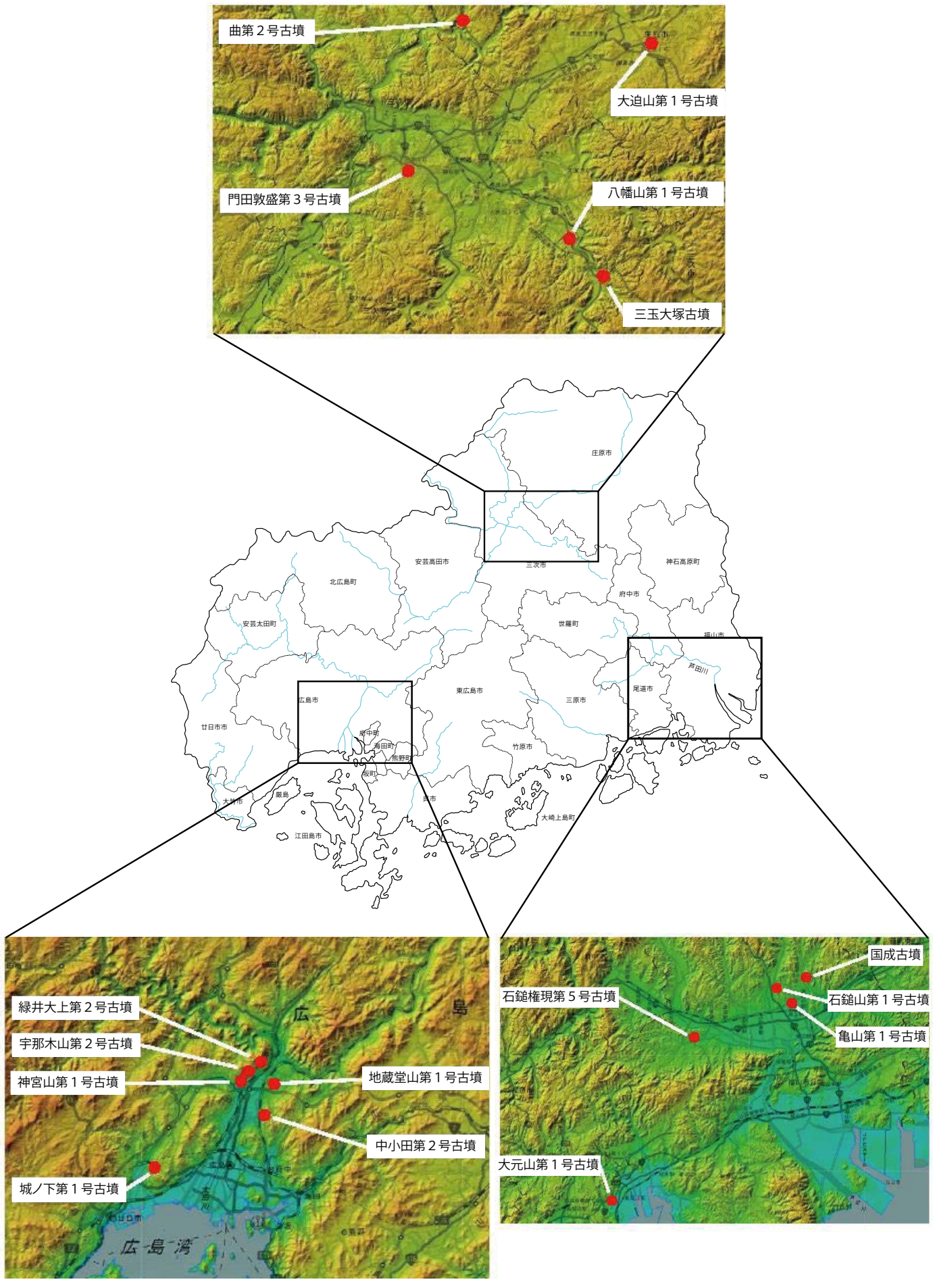


図１　広島県内関係遺跡分布（縮尺任意）

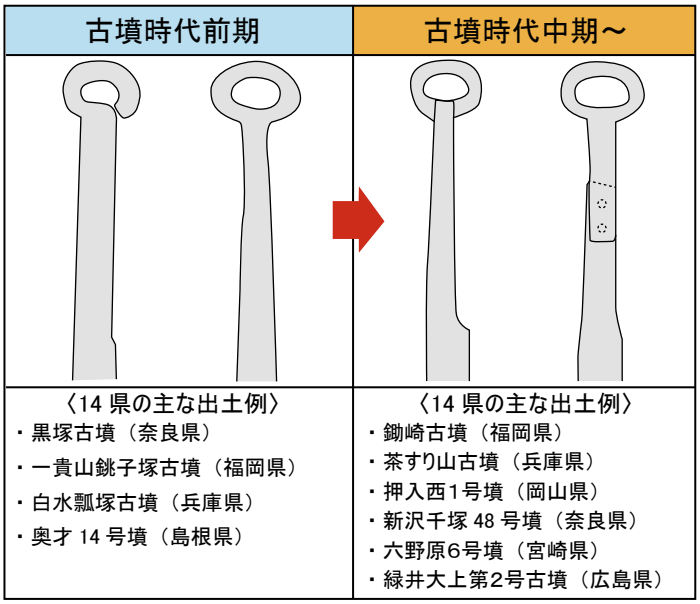


図２　古墳時代前期～中期の素環頭大刀の変遷模式図

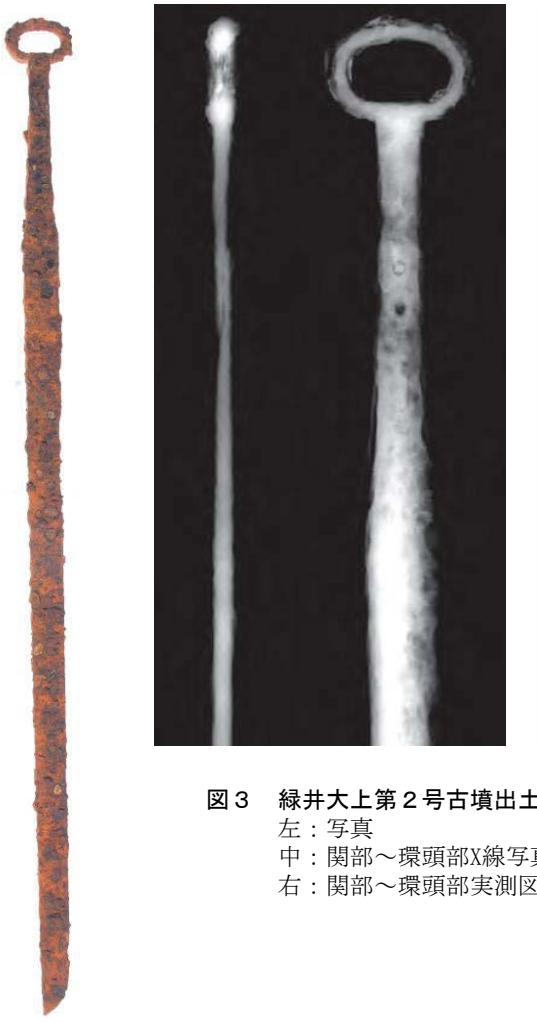


図３　緑井大上第２号古墳出土素環頭大刀
左：写真
中：関部～環頭部X線写真
右：関部～環頭部実測図（縮尺任意）

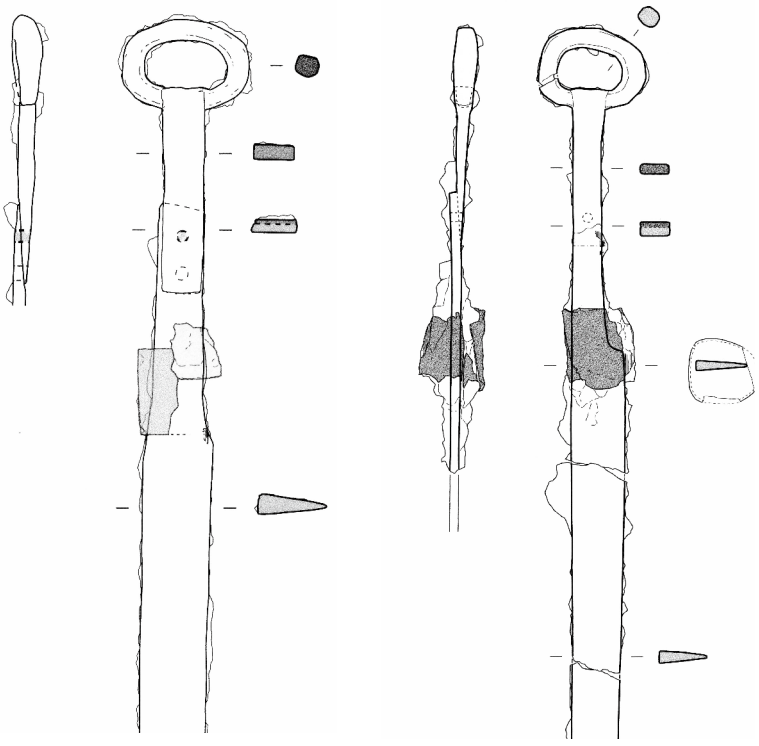


図４　門田敦盛第３号古墳出土素環頭大刀
関部～環頭部実測図（縮尺任意）

刀剣類に関わる年表

西暦	時代	日本列島での主な出来事	朝鮮半島	中国大陸
BC300	弥生前期	稲作農耕が伝わる （金属製武器の導入　北部九州で墳墓への副葬はじまる）	青銅器時代 初期鉄器時代 忠清南道・松菊里遺跡	戦国
	弥生中期	福岡県・吉武高木遺跡 金属器･ガラス加工の開始 福岡県・須玖遺跡群 （鉄製品の導入　墳墓への副葬はじまる） （素環頭大刀、鉄剣の普及　鉄戈、鉄鉾の一時的導入） 福岡県・立岩遺跡 鳥取県・中尾遺跡 石川県・八日市地方遺跡	漢武帝、 楽浪郡を設置 （紀元前108年）	秦 前漢
AD1	弥生後期	鉄製品の本格的普及 後漢光武帝より「漢委奴国王」金印を賜る（57） 石川県・白江梯川遺跡 （直刀の出現） 鳥取県・宮内第1遺跡１号墓 鳥取県・青谷上寺地遺跡 岡山県・楯築墓 島根県・西谷３号墓 福井県・小羽山30号墓	原三国時代 金海市・良洞里遺跡	新 後漢
100				
200	弥生終末期	鳥取県・宮内第1遺跡３号墓 福井県・乃木山墳丘墓 （ヤリの出現）	公孫康、 帯方郡を設置	
300	古墳前期	卑弥呼、 魏へ遣使（239） 前方後円墳の出現 奈良県・ホケノ山古墳 奈良県・黒塚古墳 岡山県・浦間茶臼山古墳 石川県・千代・能美遺跡 鳥取県・美和32号墳 奈良県・メスリ山古墳 （鉄鉾の再登場と普及） 福岡県・一貴山銚子塚古墳 奈良県・東大寺山古墳 佐賀県・谷口古墳	三国時代 高句麗、 楽浪・ 帯方郡を滅ぼす （313） 百済近肖古王、 倭に七支刀を贈る （369）	三国時代 西晋 五胡十六国時代 東晋
400	古墳中期	百舌鳥・古市古墳群で巨大古墳の造営はじまる 宮崎県・南方39号墳	倭、 新羅に侵入するが高句麗に撃退される （391 ～ 404） 高句麗、 広開土王碑建立（414）	

西暦	時代	日本列島での主な出来事	朝鮮半島	中国大陸
	古墳中期	倭の五王が南朝に遣使(421～502)		
		兵庫県・茶すり山古墳 兵庫県・雲部車塚古墳 (刀剣類の国内生産の可能性を示す生産遺跡が登場) 奈良県・南郷遺跡群	慶尚北道・皇南大塚 慶山市・林堂古墳群	南北朝時代
		和歌山県・西庄遺跡 宮崎県・下北方５号地下式横穴墓 佐賀県・汐井川古墳群 広島県・城ノ下古墳群 埼玉稲荷山古墳鉄剣「辛亥年」(471) 広島県・空長第1号古墳 三重県・おじょか古墳 江田船山古墳銀錯銘大刀 (振り環頭大刀の出現) 大阪府・峯ヶ塚古墳 和歌山県・大谷古墳 佐賀県・牟田辺9号墳 宮崎県・島内139号地下式横穴墓	百済、高句麗により漢城陥落、熊津遷都(475) 慶尚南道・玉田古墳群	
500	古墳後期	横穴式石室の普及 大阪府・今城塚古墳 (装飾付大刀の普及) 三重県・井田川茶臼山古墳 筑紫君磐井の乱(527) 武蔵国造の乱(534) 上毛野国に屯倉設置(535) 仏教が伝来（538） (製鉄遺跡が登場) (頭椎大刀の出現) 額田部臣銘鉄刀 島根県・岡田山1号墳 島根県・上塩冶築山古墳 奈良県・藤ノ木古墳 岡山県・岩田14号墳 物部氏本宗家の滅亡(587)	忠清南道・武寧王陵 金官加耶、滅亡(532) 百済、泗沘遷都(538) 大加耶、新羅に併合し加耶諸国、滅亡（562）	隋
600	飛鳥	飛鳥時代の開始(592) 冠位十二階の制定(603) 福岡県・元岡G6号墳 三重県・坂本1号墳 前方後円墳築造停止 大化の改新（乙巳の変：645） 兵庫県・箕谷２号墳 埼玉県・西原1号墳 (古墳への刀剣類副葬の減少) 藤原京遷都(694) 古墳築造停止	百済、滅亡（660） 白村江の戦い（663） 高句麗、滅亡(668) 統一新羅時代 新羅、朝鮮半島を統一(676)	唐
700	奈良	平城京遷都(710)		

基調講演講師・パネリストのプロフィール

田中　晋作（たなか しんさく） 山口大学人文学部 客員教授　　1955（昭和 30）年生

〔武器・軍事研究等の主な論著〕

「武器の拡散にみる地域間関係」『古代武器研究』 Vol.13　2017 年

「古墳時代中期の鎹出土古墳について－百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとに編制された軍事組織の特質－」『古代学研究』第 214 号　2017 年

渡瀬　健太（わたせ けんた）

兵庫県立考古博物館埋蔵文化財課 主任　　1989（平成元）年生

〔刀剣類研究等の主な論著〕

「武器からみた古墳時代中期の播磨」『武器からみた古墳時代の播磨』第 18 回播磨考古学研究集会　2018 年

『藤井古墳群』兵庫県文化財調査報告第 515 冊　2021 年（共著）

水野　敏典（みずの としのり）

奈良県立橿原考古学研究所 資料課長　　1965（昭和 40）年生

〔刀剣類研究等の主な論著〕

「黒塚古墳出土武器をめぐる諸問題」『黒塚古墳の研究』2018 年

「博多遺跡群にみる古墳時代前期の鉄器生産の一様相」『古墳文化基礎論集』2021 年

土井　翔平（どい しょうへい）

佐賀県文化・観光局文化課文化財保護室 主事　　1989（平成元）年生

〔刀剣類研究等の主な論著〕

「古墳時代前期の北関東における儀禮行為の波及と地域統合」『駿台史学』第 158 号　2016 年

「佐賀平野における古墳時代後期の集落と古墳の動向」『集落と古墳の動態 3　古墳時代中期末～古墳時代後期 』第 23 回九州前方後円墳研究会　2022 年

加藤　徹（かとう いたる）

宮崎県立西都原考古博物館 主査　　1979（昭和 54）年生

〔刀剣類研究等の主な論著〕

『百余国の“王”と「王之山」の玉璧～弥生時代の“王墓”と舶載品～』宮崎県立西都原考古博物館令和３年度特別展図録　2021 年

「蛇行剣に関する一研究ノート」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第 18 号　2022 年

尾崎　光伸（おざき みつのぶ）

広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所 主任学芸員　　1963（昭和 38）年生

〔刀剣類研究等の主な論著〕

「備後南部の弥生土器編年について (1)　―後期前葉から中葉古段階―」『広島県立歴史博物館研究紀要』第 19 号　2017 年

「備後南部の弥生土器編年について (2)　―後期中葉新段階から終末期―」『広島県立歴史博物館研究紀要』第 22 号　2020 年

第６回　古代歴史文化講演会
刀剣が語る巨大古墳の時代　資料集

発行年月日　令和４年１０月３０日
編　　集　古代歴史文化協議会事務局　（奈良県立橿原考古学研究所内）
〒 634-0065　奈良県橿原市畝傍町 1 番地
TEL：0744-24-1101　FAX：0744-24-6747
発　　行　古代歴史文化協議会　http://kodairekibunkyo.jp/

主催　古代歴史文化協議会　　共催　大阪歴史博物館